



# Anchor

アンカー

INSIDE

ニュースウォッチ 3

地震災害は何を意味するか? 15

巡礼者たちの煩悶 20

完全論へのつまずき

日本三文豪の煩悶 32

57号  
2016年7月

# 巻頭言

世界は何事か大事件に向かって動揺している。「大気の不安定」という言葉がよく用いられるこの頃。

それは、政治界もしかり、経済界もしかりである。そういう背景で宗教界は「愛、平和、一致」の名目で大連合に向かっていて、今、世界に起こっていることについて、それぞれの専門家たちは、賛否両論を戦わしている。評論家も指導者たちも一般人も恐怖と不安を持つ人々、悲観主義者もいれば、どんな悲惨事が起こっても、人間の英知はそれを乗り越えていくことができるとする楽観主義者もいる。また、第一次、第二次世界大戦後も乗り越えて見事に復興してきた。様々な自然災害、例えば、スマトラ沖大震災、中国四川省大地震、また、日本では、阪神淡路大地震、新潟大地震、東日本大震災、熊本大地震等々のパニックからも復興してきたではないかと…時が過ぎると「平和だ無事だ」と「致命的な安心感」に陥ってしまう。悲観主義者、楽観主義者などと分類されずに、明日のことは考えずに、「ケセラセラ族—なるようになるさ」と過ごす人々…

揺れ動く日本・EU・アメリカという記事に横山隆牧師はこう詠んでいる：「太平の眠りを覚ますD.トランプそのいななきに夜も眠れず」と。

「神の抑制のみたまは今、世からとり去られつつある。暴風、嵐、火事、洪水、海陸の災害が次々と急速に起こっている。科学はこれらのすべてを説明しようと試みる。われわれの周囲に頻繁に起こっているしるしは、神のみ子の来臨が近づいた事を告げているのであるが、それは真の原因よりも他のせいになっている。人々は、神の僕たちが印されるまで風を吹かせないように、四隅の風をひきとめている見張りの天使たちを認めることができない。だが神が天使たちに風をゆるめるようにお命じになると、描写することのできないような争闘の光景が現れるのである。

われわれが生存している時代は、厳粛にして重大である。神のみたまは徐々にではあるが、確実に地からとり去られつつある。……海陸の災害、社会の不安状態、戦争の警報などが危機をはらんでいる。それらは、最大の規模をもった事件が近づいていることを予告している。悪天使たちは勢力を結集して、陣地を固めている。彼らは最後の大危機のために強化されつつある。まもなくこの世界に大変化が起ころうとしているが、最後の運動は急速なものとなるであろう」。クリスチャンの奉仕70

「人間の香油ではいやすことのできない悲しみが、この世に起こる時が近づいている。神のみたまはとり去られつつある。海陸の災害は次々と急速に起こっている。地震やたつまきによって、また火事や洪水による破壊によって、多くの人命や財産が失われたことを何度聞かされることだろう。これらの災害は、組織することも抑制することもできない自然の力が、気まぐれに突発するものであり、かつ人間の力では全く統制することのできないものように見られている。しかしそうしたすべてのことの中に、神の目的が読みとれるのである。それらは神が、人間をその危機感に目覚めさせようとする方法の一つである」。クリスチャンの奉仕71

しかし、宗教指導者らは何と言うか？

「彼らは、手軽にわたしの民の傷をいやし、平安がないのに『平安、平安』と言っている。……主はこう言われる、『あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしえの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ。しかし彼らは答えて、『われわれはその道に歩まない』と言った。わたしはあなたがたの上に見張びとを立て、『ラッパの音に気をつけよ』と言った。しかし彼らは答えて、『われわれは気をつけることはしない』と言った」。エレミヤ6:14-17

イエスは、終わりの時に「人に惑わされないように気をつけなさい」と警告された(マタイ24:4)。聖書は、根拠のない単なる恐怖心を煽り立てるのではなく、本当の危機感と本当の希望を我々に与えている。

サンライズミニストリー代表 金城重博



# PROPHETIC 預言的 NEWS WATCH 時事ニュース

## パナマ文書と 黙示録 18 章の預言



キーワード：【パナマ文書】【タックスヘイブン】  
【モサック・フォンセカ】

- ・大金持ちが税金ゼロの国に会社を創って税金逃れをする。
- ・タックスヘイブンとは「租税回避地」のこと。
- ・「モサック・フォンセカ」とは、パナマにある「パナマの法律事務所」のことである。

NHK、クローズアップ現代 4月20日『追跡 パナマ文書の衝撃』として報道された。現代、わずか**1%**の人たちに世界の富の半分以上が集中していると言われてい

る。莫大な富がどこに隠されているのか。世界の富裕層の富がどこに流れているのか、その氷山の一角が暴露されたのだ。しかし、このニュースの意味するところは、一般大衆にはどんなインパクトを与えただろうか。ほとんどの人に対岸の火事として見逃されている。しかし、私は真実を知って驚いた。

我々凡人にどんな意味があるのだろうか。「富を制

する者が天下を制す」と言われている。世界統一政府を狙っている者たちは、莫大な富を隠し持っている。近未来に不正金融操作の実態が明白にされるであろう。聖書の預言に結びつけて考えて見たい。下記のような見出しが私の注目を引いた。

●前代未聞の巨大金融スキャンダルがリークされた。史上最大の情報漏洩、パナマ文書が公開された。  
<http://ameblo.jp/tubasanotou/entry-12146979856.html>

●世紀のリーク「パナマ文書」が暴く権力者資産運用、そして犯罪

●史上最大級のリークと100を超えるメディアの調査報道が生んだ世界規模のスキャンダル

<http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2016/04/43-1.php> 2016年4月5日(火) 16時36分

### パナマ文書とは：

パナマの法律事務所『モサック・フォンセカ』が管理していたタックスヘイブンの金融取引の記録（1970年代～2016年）で、この匿名の人物と南ドイツ新聞が、この情報が外部に漏れないように暗号を使って1年以上もやりとりをし、最終的に1150万件もの文書データや電子メールを獲得したという内部機密データ。そして、満を持して今月初めに、今世紀最大のリーク（情報漏えい）『パナマ文書』として世界中に発信された。

### パナマ文書で漏れた世界の富裕層の人々



この機密文書が漏れて、どんなことが起きているか？

・アイスランドのデモ。結果として首相辞任。



・「パナマ文書」が起こした余波 - レイキャビクの国会議事堂前で大規模なデモが発生した。Stigtryggur Johannsson-REUTERS

・イギリスのキャメロン首相の退陣を求めるデモ。窮地に追い込まれている。

## 証言：



【青山学院大学学長・三木義一】

「パナマ文書」には、日本人の名前や企業が400ほど含まれていると聞いています。現在、分析、取材が続けられているので、今後の報道に注目です。今回明らかになったのは、民主主義の根幹を揺るがす問題です。税金は本来、富める者が負担し、社会の格差を縮小し安定させるものですが、現代では逆に庶民が負担し、それを利用して富める者がさらに富み、「格差」は拡大するばかりです。各国は法人税の引き下げ競争をして、その穴を埋めるために結局、庶民が負担する消費税などで埋めようとしています。この問題に日本人ももっと注目し、もっと怒ってもいいと思います。

【ジャーナリスト・池上彰】



タックスヘイブンについては、これまで世界の報道機関が競い合って伝えてきました。その中でも今回の「パナマ文書」は本物の特ダネです。権力者の「隠れた資産運用」のエビデンス（証拠）を示し、世界を動かしました。

インターネットに分かりやすく説明があったので許可を頂いて掲載する。パナマ文書 - タックスヘイブンが分かると、黙示録18章でやがて世界的に暴露されるであろう世界一の金持ちは誰かが分かるだろう。

【歩叶コラム】より

<http://arcanaslayerland.com/2016/04/08/tax-haven/#comment-1030>

## タックスヘイブンとは？日本人とパナマ文書の関係や仕組みを解説！

今世紀最大のリークである『パナマ文書』を知る上で、まず抑えておく必要があるのが『タックスヘイブン』です。

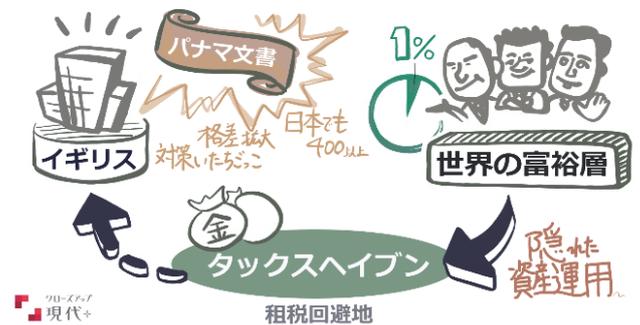
タックスヘイブンとは『租税回避地』と言い換えられるのですが、厳密に言うと、無税だったり極端に低い税率の国のことを言います。

非常にわかりやすく説明すると、企業や個人が税金の支払いを回避するために、税金の必要のない国（タックスヘイブン）に資産を移すという意味で使われています。

要するに、違法すれすれ(?)の『やりすぎた資産運用』ですね。

今回は、『あまりよくわからない…』といった方のために、世界激震の金融スキャンダル『パナマ文書』と日本（日本人や日本企業）との関係や、タックスヘイブンの仕組みについて、わかりやすく解説していきます。

## タックスヘイブンとは？



追跡! 『パナマ文書』の衝撃

2016/04/20

まず、『タックスヘイブンとは何ぞや?』ということなのですが、先程もお伝えした通り、『税金の必要のない国』のことを指します。

結論から言わせてもらうと、タックスヘイブンの概念は『国際金融取引をスムーズに行うため、海外の企業が、法人税などの税金が免除される国（タックスヘ

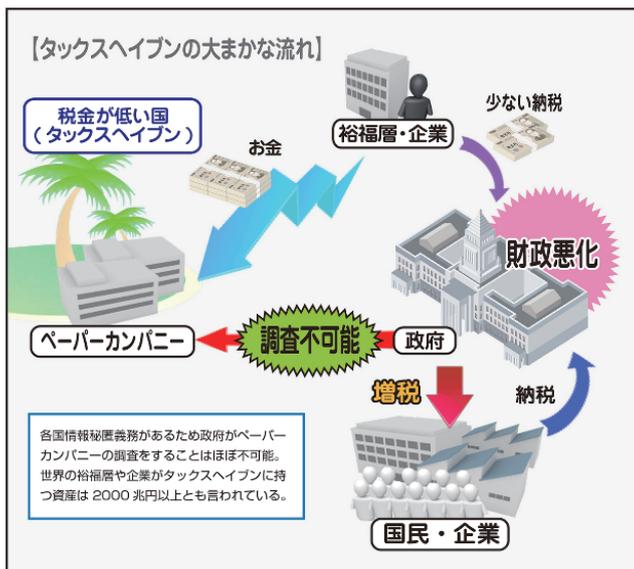
イブン) にペーパーカンパニー (実態のない会社) を作り、自国の税を逃れる対策のこと』です。



(タックスヘイブンにある郵便局の私書箱)  
(引用元: <http://gigazine.net/news/20121219-cayman-island/>)

そして、こうした国(タックスヘイブン)に設立されたほとんどの企業は、現地に実態があるわけではなく、せいぜい連絡用の私書箱が郵便局に並んでいるくらいです。

こういったペーパーカンパニーの情報は基本的に非公開なので、その会社の代表者が誰かわからないということもよくあることだし、第三者が調べられるものでもありません。



このように完全秘密情報が守られている中で、海外の企業はこのような税金がかからない国(タックスヘイブン)に全く関係のない会社を装ったペーパーカンパニーを作り、自国の税収から逃れ、資産運用をしていたのです。

つまり、ということ？

わかりやすく言うと、**企業は儲かってないフリをする**のです。

つまり、タックスヘイブンにある実態のないペーパーカンパニーに『**支払い**』という形で**資産を移す**のです。そうすることによって、企業から資産が一時的に消えるので、本来掛けられべき税金から逃れることができます。

先程も言ったように、タックスヘイブンでのペーパーカンパニーの情報を他人が知ることはできません。自国の国税当局であったとしても、その裏を取る術はないと言われています。

つまり、一旦タックスヘイブンのペーパーカンパニーに預けられたお金は、**その代表者が自由に使えるタックスフリーな資産**となるのです

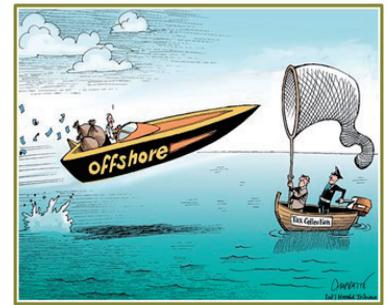
そんな方法あったら誰だってやりますよねー。

だって違法じゃないし、資本主義の究極進化だし、わざわざ口の固い海外の法律事務所を通してペーパーカンパニーを作っているんだし、第一、**絶対バレないんだから!**

## タックスヘイブンの仕組みについてわかりやすく解説!

そもそも、なぜタックスヘイブンでは税金が必要ないのでしょうか？

ここではタックスヘイブンの仕組みについてわかりやすく解説したいと思います。



まず、税金のことですが、日本では、何かを購入したり、お給料や投資などで収入があれば、国に税金としてお金を支払うことで、国の社会保障やインフラ整備、公務員の給料がまかなわれるという仕組みになっています。

これは世界中どの国でも大体同じで、個人だろうと法人だろうと、基本的に収益や支出には『**税 (TAX)**』が必要です。

しかし、一部の発展途上国と言われる国には、この『**税 (TAX)**』が必要ない国も存在し、そういった国のことを『**タックスヘイブン (租税回避地)**』と呼びます。

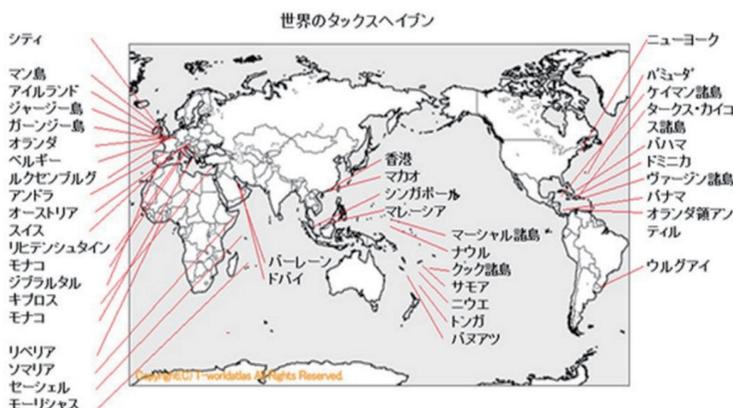
税金がなくても国が回る…。

そんなことが可能なかい？

われわれ日本人からするとアンビリバボーな(信じがたい)話なのですが、そんなヘイブンな国がいくつが存在するのは確かなのです。ちなみにタックスヘイ

ブンのハイブンは天国の HEAVEN ではなく、HAVEN（避難所、港）という意味です。

そして、世界ではこれだけのタックスハイブンがあります。



そこで疑問なのが

『なぜ無税で国が運営できるのか？』

ということですね。

こういった国々（タックスハイブン）のほとんどが、自国の産業を持っておらず、世界経済においては衰退の一途をたどる弱小国とされています。そこであらゆる税を無税にして、海外企業や大富豪の資産を集めることによって、国内に雇用を生み出そうとしているのです。

そういう仕組の元、モナコ公国やマン島、ケイマン諸島、パナマを始めとする国々は、タックスハイブンとして自国の経済を成り立たせているのです。しかし、その意図は、国境を超えた僻地というポイントを逆手に取られ、多くの資産家や企業などの資産隠しやマフィアなどのマネーロンダリング（資金洗浄）として利用されることとなりました。

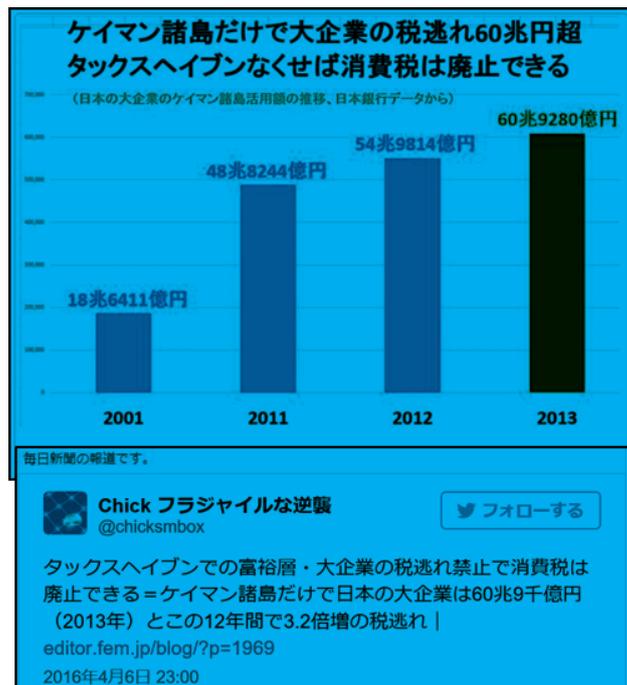
だって、絶対バレないんだから！！

といっても、先進諸国も黙ってはいません。

このまま放っておけば、自国の税金がどんどんタックスハイブンに流れていってしまうからです。

現在もすでに、タックスハイブン対策税制を打ち出し、なんとかこの問題に対して打開策を見出そうとしています。日本の場合であれば、2018年からマイナンバーでの海外預金の管理、英国領のタックスハイブンの協力を得るなどして、個人資産の管理を徹底していく方針だそうです。

これなんかはケイマン諸島だけの数字なので、氷山の一角と考えてみても 60 兆です。



兆とか言われてもよくわからないかもしれないので、一応、説明しておかないといけません。

**1 兆円 = 10,000 億円**

ピンときますでしょうか？

試算では、2013年以降、毎年 100 兆円以上のお金がタックスハイブンに流れていってることになります。

しかし、知らなければそれだけのことですが、2012年の国の税収が 45 兆円だったことを考えると、**ずいぶんなお金が税逃れ**をしていることがわかりますね。

さて、いままでの話は一部の企業と、一部の資産家がタックスハイブンを利用してたと仮定して話してきましたが、これまでそうだったように、**これらの情報はほとんど開示されることはありません**でした。

そして、われわれ国民も、よくある企業の節税対策程度の認識で済ませていました。

これまで、タンス預金だの、金持ちがお金を使わないだの言いながら、消費税を上げたり、社会保障を打ち切ったり、アベノミクスや大企業に有利になるような金融緩和など、あらゆる経済対策を打ち出し、いまでも不景気に対して立ち向かっている最中です。

国民が先行き不透明な世の中に不安を抱えている

中、南ドイツ新聞は名も知らぬ人物からある情報を受け取ったのです…。

## タックスヘイブンを利用した日本人とパナマ文書の関係

それは1年以上前のこと、ドイツの有力紙『南ドイツ新聞』に、ある匿名の人物から天地を揺るがしかねない情報が提供されました。

それが『**パナマ文書**』と呼ばれるものです。

一体、何者なんだ…

さて、このパナマ文書は世界中を巻き込んだ金融スキャンダルとして、現在、名前の記載されている各国の著名な資産家や首脳陣、スポーツ選手、企業などが批判を受ける事態になっています。

もちろん、その中には日本の大企業や個人の名前もありますが、現在では海外の主要人物にポイントを絞ったニュースとして流れています。

ごく一部の名前ですが、これだけでもそうそうたる面々です。

- ウラジーミル・プーチン（ロシア大統領）
- 習近平（中国国家主席）
- デービッド・キャメロン（イギリス首相）
- ゲンロイグソン（アイスランド首相）
- ナジブ・ラザク（マレーシア首相）
- ジャッキー・チェン（香港・映画俳優）
- リオネル・メッシ（アルゼンチン・サッカー選手）
- ミシェル・プラティニ（欧州サッカー連盟元会長）

### 租税回避地の利用が指摘された主な著名人ら

- 中国の習近平国家主席の親族**  
 2009年に英領バージン諸島に法人設立
- ロシアのプーチン大統領の友人ら**  
 英領バージン諸島の法人などを使い、20億ドルの金融取引
- サッカーのメッシ選手**  
 スペイン当局による脱税捜査で判明していない法人をパナマに所有
- 香港の俳優、ジャッキー・チェンさん**  
 法律事務所を通じ少なくとも6法人を所有

実際には、習近平中国国家主席などは親族の名前を借り、ロシアのプーチン大統領は友人の名前を借りてペーパーカンパニーを設立し、資金隠しをしていたと言われています。

では、我が国日本はどのような影響があったのかというと…

今のところ特になしと言った感じでしょうか？

やはり政界首脳陣クラスの名前が出てこない、（日本では）そこまでニュースとして取り扱われないのかもしれませんが、世界規模で巻き起こっている大スキャンダルであることはだけは、違いありません。

よくある疑問に、タックスヘイブンは違法でないのか？というものがありますが、**厳密に言うと違法ではありません**。じゃあ、何も問題ないのか？というと、そういうわけでもありません。

なぜなら、わざわざタックスヘイブんに**自社と無関係**を装ったペーパーカンパニーを設立し、**巨額の資金を移す事自体、非常に怪しい**からです。

もちろん、金融投資や海外に拠点を置く日本企業や海外在住の日本人投資家にとっては利用価値の高い節税対策です。

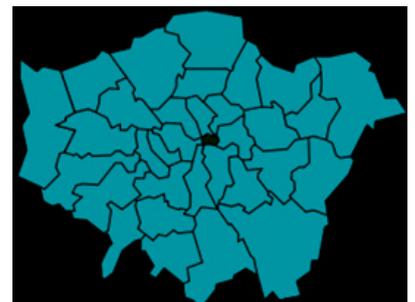
ただ、日本企業がタックスヘイブんにペーパーカンパニーを作って、税金がかからない国の銀行口座に資金をプールするのは、コンプライアンス上問題ないことなのでしょうか？

そして、パナマ文書では、企業だけでなく、個人の資産家もそういう手法を使って資産隠しをしていたことが明らかになっています。その中には日本人や日本企業の名前も明記されており、この先、ペーパーカンパニーの代表者の個人情報や金融取引の記録なども明らかになると言われていますが、どうなることやら…。

## パナマ文書に掲載されている日本企業

世界最大のタックスヘイブンは、シティ・オブ・ロンドンだと言われている。これは、英国のロンドン中心部にある地域。

ニューヨーク、シティ・オブ・ロンドン、バチカン・シティの権力の三角構造。（しかし、富はバチカンに流れていることが暴露される時がくる。最も秘密



## パナマ文書に掲載されている日本企業

電通	ジャフコ	シャープ	楽天ストラテジー
バンダイ	JAL	三共	ソフトバンクグループ
サンライズ	石油資源開発	東レ	SBI
大日本印刷	オリックス	パイオニア	セコム
大和証券	丸紅	ホンダ	ソニー
ドリームインキュ	三菱商事	KAORI	みずほFG
ベータ	商船三井	INTERNATIONAL	三井住友FG
ドワンゴ	日本製紙双日	KAWAGUCHI	三井物産
ファーストリテイリング	日本郵船	TECHNOLOGY	



性の高い金融機関がある)。

世界最大のタックスヘイブンの一つであるスイス銀行の難攻不落の秘密のシステム。

しかも、そのアメリカ自身が、世界最大のタックスヘイブンを抱えているという矛盾。

デラウェア州、ネバダ州 (ラスベガス)、ワイオミング州、フロリダ州 (マイアミ) はタックスヘイブんです。

しかも企業に著しく有利であったり、犯罪に関わるタックスヘイブんです。

アメリカは、ダブルスタンダードだったりします。

世界最大のタックスヘイブンは、アメリカとイギリスだと言われたりもしています。

「米政府はアメリカにはお金がないと言っていますが、米国民の税金の殆どが、米国内で使われずに、米国外に送金されているのです。英米の条約の下で、米国民の税金はイギリス経由でパナマに流れている」と言っている人もいます。 [http://mizu888.at.webry.info/201310/article\\_51.html](http://mizu888.at.webry.info/201310/article_51.html)

こんなことを言っている人もいます：

「P2 で有名なパチカン銀行もすごいらしい。このパナマ文書なんて、パチカンに比べたら可愛いもんだよな。あそこは世界最大の闇金融だもん。戦中はナチスと結託して、戦後はユダヤと結託してるし。スイスの銀行の闇口座に、パチカン資金が唸るほど眠ってる。」

## 聖書はこう警告している：

ヤコブ 5:1-5 「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。あなたがたは、自分の身に降りかかろうとしているわざわいを思って、泣き叫ぶがよい。あなたがたの富は朽ち果て、着物はむしばまれ、金銀はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している。あなたがたは、地上でのごり暮らし、快樂にふけり、『ほふるるる日』のために、おのが心を肥やしている」。

## しかし、注目！

世界最小の国、パチカンに最大の富が蓄積されている！

なぜ、そう断言できるのか？これはいわゆる「陰謀論」というものではない。

黙示録 18 章には、やがてその醜態が暴露される時が来ることが預言されている。

18:5 彼女の罪は積み積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる。……

18:9 彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、彼女が焼かれる火の煙を見て、彼女のために胸を打って泣き悲しみ、……

18:12 その商品は、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、各種の香木、各種の象牙細工、高価な木材、銅、鉄、大理石などの器、

18:13 肉桂、香料、香、におい油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊、馬、車、奴隷、そして人身などである。

18:14 おまえの心の喜びであったくだものはなくなり、あらゆるはでな、はなやかな物はおまえから消え去った。それらのものはもはや見られない。

18:17 これほどの富が、一瞬にして無に帰してしまおうとは」。

あるウェブサイトには下記のような記事があった。

## バチカンは戦争で巨額の富を得ています



「この地上で最も富める人、権力のある人はだれか？この本は、2000年間の富の蓄積を描写し、ローマ・カトリック宗教組織の権力を追う。シーザーから、この宇宙時代に至るまでの信じがたいパノラマはあなたの歴史観を変えるであろう」。

銀行取引はイタリアが発祥地です。そして全ての銀行がバチカンと繋がっています。

世界の中央銀行システムはイタリアの中央銀行構想を再現したものです。中央銀行はバチカンに由来しています。バチカンの複数機関（マルタ騎士団など）は、インサイダートレーディングの情報を入手しながら、世界経済を操作しています。

バチカンは、戦争地域からの難民受け入れサービスや人道支援サービスを行うことで巨額の富を得ています。戦争が起これば起こるほどバチカンは利益を得ることになります。バチカンが難民を支援し戦争地域を混乱させたいのはそのためであります。

マルタ騎士団は世界最大のチャリティ団体です。カトリック教会は非課税のチャリティ団体を何千も所有しており、彼らの人道支援活動を通して巨額の富を得ています。

バチカン銀行は巨大なマネーロンダリング組織です。

金融界の軍属主義者たちと同様にバチカンは嘘ばかりついています。**バチカンは言う事とやることが正反対です**。バチカンは、世界最大のチャリティ団体を指揮、管理していますが、バチカンがチャリティのためにお金を寄付したことなど一切ありません。

また、バチカンが教会法を作り、それを基に普通法、海事法、その他の法律が作られます。アメリカの法律家はシティ・オブ・ロンドンのテンブルバーに忠誠を誓っています。

歴史的にも全ての金融ビジネスと法律は全てローマに通じます。<http://ameblo.jp/tubasanotou/entry-12146979856.html>

2013年の2月に前法王ベネディクト16世がほとんど前例のない生前退位に踏み切ったのは、**聖職者による性的虐待スキャンダルばかりでなく、金融スキャンダルのためだった**。

3月13日にイエズス会のフランシスコ法王が選出された。これは異例なことである。

### イエズス会の目的：

「その目的とするところは、富と権力の獲得であり、プロテスタント主義をくつがえし、法王至上権を復興することであった」。「法王教の全闘士中、最も残酷で無法なイエズス会」である（大争闘上 293, 294）。しかし、徹底した奉仕の手段も使う。

「**世界は富の分配をしなければならない**」と言って全世界の人々の人気を集めている。驚くべき聖書の預言の成就である。「各時代の争闘」によると、**富と権力の獲得**は法王のイエス・キリストに似せたパフォーマンスに隠されている。どのように富を集めるか、その巧妙さには目に余るものがある。国連の難民支援機関のUNHCR、イエズス会難民サービス(JRS)等々の裏に何があるのだろう。



プロテスタント主義は確実にくつがえされつつある。2017年10月に何が計画されているだろうか。異例のイベントが…。カトリックとルーテル、宗教改革500周年行事が…その次に「法王至上権」が確立されるであろう。

パナマの文書、タックスヘイブンは、氷山の一角であることを覚えていよう。水面下で巨大組織がうごめいている。

使徒パウロは預言した：

「だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、**不法の者**、すなわち、**滅びの子**が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拜まれたりするものに反抗して立ち上がり、**自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する**」(2テサロニケ 2:3,4)。

その滅びは、ダニエル 11:45、黙示録 18 章に書かれている。

「そこでイエスは答えて言われた、『人に惑わされないように気をつけなさい。…多くの人を惑わすであろう』(マタイ 24:4, 5)。

## トランプ現象が意味するもの

### ドナルド・トランプは1000人の保守的な福音主義のリーダーと会見



左ジェリー・フォルウェル・ジュニア  
リパティー大学学長

リパティー大学の学長、ラルフ・リードー信仰&自由連合の会長、フランクリン・グラハム牧師-サマリタン・パースの会長とビリー・グラハム伝道協会等々のアメ

「強いアメリカ」への回帰を強く提言するトランプ氏は、1000人の保守的な福音主義の指導者たちとの会見を持った。

その時、ジェリー・フォルウェル・ジュニア

リカの主要指導者たちと会い、おおかた彼らの支持を得たようだ。

トランプ氏は、「私は本当にあなたがたの味方であり、私はあなた方と同じように熱心な信者です」と言った。2016/01/21

### ドナルド・トランプ氏は、もし彼が大統領となれば、キリスト教徒は大きな力を持つことになるだろうと発言。2016/01/19

【Keep the Faith】より：

共和党の大統領候補のドナルド・トランプ氏は、アイオワ州のスー郡にある、クリスチャンのコミュニティで、土曜日のスピーチで「私は真の信者です」と明言して次のように語りました：

「そしてあなたがたの多くも真の信者です — 私はみんなそうであることを望んでいます — この部屋

トランプ氏は、キリスト教徒が合衆国で強く政治的影響力を行使できるはずなのにそうしていないことを嘆きました。「もし



あなたがたの力が加わるなら…つまり、皆さんの応援で我々と一緒になるなら我々のグループの力は2億5千万になり得ます。にもかかわらず、我々は我々が持つべき威力を発揮していません。正直言ってある教会は課税上の地位を恐れていると思います」と彼は付け加えました。「しかしもし皆さんが団結するなら、政治家たちがみなさんにできることは何もないという事実を知っています。皆さんが大きな力を持っているのです。しかし、クリスチャンたちは彼らの力を使おうとしません」とトランプ氏は言いました。彼は続けて、「我々は強くならなければなりません。**我々は…宗教の名を持ちながら益々力がなくなってきています**」と言いました。

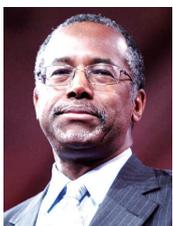
「ところで、キリスト教は、組織がなくても力を持つでしょう」と彼は付け加えました。「もし私が大統領に選ばれたら、あなたがたは大きな力を持つことになります。あなたがたは他の誰も必要としません。あなたがたを最もよく代表する人を持つことになるでしょう。それを覚えていてください」。

教会と国家が合併することは、カトリック教の原則である。そしてそれは休業令に導くでしょう。合衆国は、憲法の保護のもとにある自由（宗教的な自由を含めて）を少しずつ崩してきています。過去に政教一致を強くしようとした試みがありましたが、宗教的な自由の憲法の保護の強い防波堤のために、宗教的な国家主権主義から守られてきました。しかし、もはやそのようなことはなくなりつつあります。近年、宗教的な自由さえ襲撃の下にあるという点で、自由がかなりそこなわれました。トランプ氏を支持する共和党員が多くなっていることから、いったん非宗教的な自由主義、そして社会主義に対する反動が成熟すると、日曜休業令と他の圧制的な制定が出てきそうです」。

「米国の主要な教会が、その共通の教理において合同し、国家を動かして教会の法令を施行させ、教会の制度を支持させるようになるその時に、プロテスタント・アメリカは、ローマ法王制の像を造り、その必然の結果として、反対者たちに法律上の刑罰を加えることになるのである。」大争闘下 164

「共和党の支持基盤のキリスト教福音派の大学で支持を訴えました。共和党、ドナルド・トランプ氏：『私はキリスト教を守る。我々はキリスト教のもとに団結しなければならない』と訴えました」。

## セブンスター・アドベンチスト初の大統領候補ベン・カーソン



ミシガン州デトロイト出身。ジョン・ホプキンス大学の「ジョン・ホプキンス小児センター」に勤務。33歳の若さで小児神経外科部長となり、頭部が癒着したシャム双生児を分離する手術に成功、1987年に米国で「最も尊敬する

医師」と高く評価され話題となる。2013年に引退する。

1996年の映画「ザ・エージェント」でアカデミー賞助演男優賞を受賞したキューバ・グッディング・ジュニア主演のテレビドラマ「奇跡の手」(Gifted Hands: The Ben Carson Story)のモデルとなった。

2015年、大統領選挙にむけて、共和党初の黒人立候補者となった。2016年3月4日に選挙戦から撤退したが、3月11日に実業家のドナルド・トランプへの支持を表明する。ウィキペディアより引用。

「『私はドナルド・トランプ氏が嫌い』とか『ヒラリー・クリントン氏が嫌い』あるいは、『誰々が嫌い』という人があまりにも多い。しかし、ドナルド・トランプとかヒラリー・クリントンとかの問題ではない。これは（大統領選挙）、人民による国家の問題であり、政府の、政府のための、政府による国家の問題である」YAHOO ニュース参照。 <https://www.yahoo.com/news/transcript-donald-trumps-closed-door-meeting-with-evangelical-leaders-195810824.html>



「強いアメリカを取り戻す」と繰り返し訴えるトランプ氏が大統領になれるかは分からない。今のところ過激な発言で人気を呼んでいるが…。アメリカが今後どのように豹変するか分からないが、誰が大統領になるうとも黙示録 13章の 11節からの預言は近い将来、成就するだろう。

二大原則、すなわち共和政体と信教の自由をもってスタートした新世界—アメリカはどここの国よりも祝福されてきたが、近い将来「突然」憲法を変えられている (CT417)。聖書の預言を読んでみよう：

黙示録 13:11 「わたしはまた、ほかの獣が地から上つて来るのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のようにものを言った」。小羊はキリストを象徴している。プロテスタントアメリカは「龍のようにものを言う」と預言されている。龍と言うと黙示録 12章に「サタンとか悪魔」と言われている。プロテスタント・アメリカが、カトリックとの癒着で、新世界秩序を構築するが、神の望んでおられるものではなく、悪魔的なものであることが分かる。

黙示録 13:12 「そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致

命的な傷がいやされた先の獣（ローマ法王教）を拝ませた。

13:13 また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえた。（これは偽キリスト教リバイバルである）。

13:14 さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。

獣の像を造るといのは、ローマ法王教の「政教一致」制度を全世界の国々に強要するということである。自由のチャンピオンであるアメリカがそうするのである。

危機が迫っている。神が与えた「良心の自由」を堅く守りたいものである。

## 英国 EU 離脱の意味



国民投票で EU 離脱を選択したイギリス。世界の経済や政治に大きな影響を与えている。

EU 首脳らは、英の EU 離脱は、公式ではないとしている。

イギリスの EU 離脱をめぐり、日本時間の 28 日夜、EU（ヨーロッパ連合）の首脳会議が行われた。これを前に、ドイツ・フランス・イタリアの主要 3 か国は 28 日、イギリスが模索している離脱通知前の非公式交渉には応じない方針で一致した。

ドイツのメルケル首相は次のように明言。

「イギリスから離脱の通知を受けるまでは、EU はイギリスと公式・非公式に協議を行わないことで合意しました」。 [http://news.tbs.co.jp/newseye/tbs\\_newseye2808071.html](http://news.tbs.co.jp/newseye/tbs_newseye2808071.html)

離婚すると言ったものの、正式な離婚手続きはされていない。さて、どんなことが起こるかを見守っていかなければならない。「英国の離脱はむしろ、皮肉

にも EU の結束を高める効果がある」という意見もある。朝日新聞 2016 年 6 月 27 日 <http://www.asahi.com/articles/ASJ6T6DRMJ6TULFA00K.html>

イギリスと EU の離脱交渉は、イギリスが離脱通知を出すことで初めて正式に始まるが、メルケル首相は「長期間にわたる停滞は望ましくない」と述べ、イギリスが早期に離脱通知を出すべきとの認識を示した。その上で、3 首脳は離脱通知前の非公式交渉には応じないことで一致した。

EU 側には、通知が先送りされ、離脱交渉の開始時期が遅れると、EU 加盟国内に動揺が広がり、反 EU 勢力が勢いづくという懸念もあるとされている。これに対して、イギリスのキャメロン首相は「EU 離脱の通知は現段階では行われぬ」と改めて明言した。

「離脱を通知する前に我々は EU との関係を決めなければならない。これは次の首相と内閣が決めることだ」と言っている。（イギリス キャメロン首相）

【<http://light-shade.net/post-751> 2016-06-27】より：

「国民投票の結果、EU 離脱が決まったイギリスで再投票の実施を求める声が高まっています。イギリス下院のインターネットの請願サイトには、26 日午後の時点で約 320 万人を超える署名が集まっているようです。世代間の意識の違いも鮮明で、結果も僅差だっただけに残留派の反発が今後も活発化しそうです。



離脱派：残留派

18～24 歳	27% : 73%
25～34 歳	38% : 62%
35～44 歳	48% : 52%
45～54 歳	56% : 44%
55～64 歳	57% : 43%
65 歳以上	60% : 40%

(引用元：英 BBC 電子版)

このように、一番若い世代では73%の人が残留派を示しています。米紙ワシントン・ポストのサイトへの投稿には『戦後のベビーブーム世代の判断ミスによって金融危機が引き起こされ、多くの若者が国境を超えると信じてきた未来は奪われてしまった』との書き込みがあるように、若い世代を中心に不満がくすぶる可能性が高まっています。このような情勢を受けて、署名が審議に必要とされる10万人をはるかに上回っていることもあり、イギリス下院の特別委員会では、28日に審議される見通しとなっているようです。イギリスのキャメロン首相は『2度目の国民投票はない』と明言していることから、再投票が行われる可能性はほとんどないと見られていますが、それでも気になってしまいます。残留派だったキャメロン首相がこのような発言をしていることや、次の首相は恐らく離脱派の人になるでしょうから、自分に不利になるような再投票の実施に踏み切るとは思えません。しかしながら、今回は若い世代からの突き上げですから、そのパワーを無視することも出来ません。状況次第ではもしかするともしかするかもしれません…。『再投票の実施』という形ではないにせよ、このまますんなりEU離脱が進むとは思えません。

しかし、英国では、“EU離脱に投票を後悔”という発言も相次いでいるという。

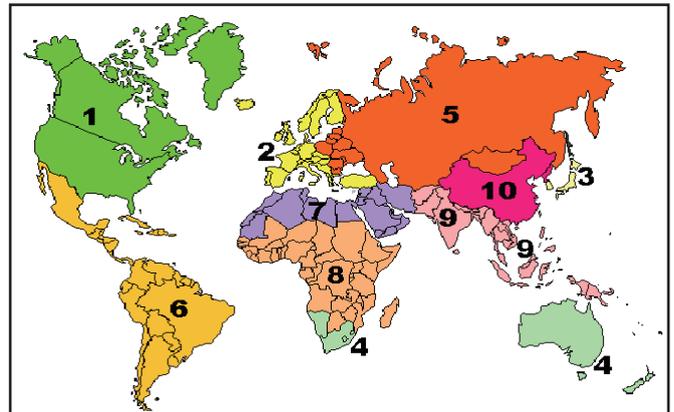
衝撃を受けた教会各派指導者たちは英国の決断を受け入れることに懸念を示しているようだ。

「ギルフォード主教のアンドリュー・ワトソン氏は、EU離脱への恐怖をためらわずに繰り返した。ワトソン氏は以前、米大統領選の候補者であるドナルド・トランプ氏と共に、EU離脱は悪夢のシナリオの1つとなるだろうと語っていた。

欧州大陸のわれわれの友人たちへのメッセージ：われわれの48.1パーセントは、これ（EU離脱）が非常に悪いアイデアだと思っていることを心に留めてほしい。2016年6月28日、クリスチャン・トゥデイ

この混乱現象は、黙示録17:12、13の「10の角」について、ローマクラブが世界を10のブロックに分割する前兆なのかについて、Prophesy Research InitiativeのDr. フランクリン・ファウラーに聞いてみた。黙示録には、次のように預言されている：「あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。彼らは心をひとつにしてい

る。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える」。すると次のような返事が来た。



【Dr. フランクリン・ファウラー】

私は10「ブロック」がすでに形成されていると思います。それはここ、USAの地理の本にさえあります。問題は反乱なくして「実施」することです。英国の人々は「反発しました」。しかし「決別」は起きていませんでした。スコットランドは実際にまだそれを阻止することができます。同じく一非常に友好的なミーティングが英国とEUのリーダーの間で昨日行われました。



「英国のEU離脱」のニュースは、世界の経済市場に影響を与えました（おそらく操られて）。「決別」は実際に起こらないであろうというのが私の「意見」です。条約などを再交渉するのに何年も要するでしょう。私は世界のすべてのところで起こるカオス（混乱）が、世界の「道徳的リーダー」が救済をもたらす段階を設定していると思います。多くの者がすでにバチカンのことを思いめぐらしています。私は来週、終末問題の記事で、手短かにその問題を取り上げるつもりです。ローマがそれを「受理する」とき、そのサタンの『光の天使』の現われる準備ができていることになるでしょう。そしてその後、終わりはまもなく来ることになるでしょう。

「欺瞞の一大ドラマの最後を飾る一幕として、サタンはキリストを装うであろう。教会は、救い主の来臨を教会の望みの完成として期待していると長い間公言してきた。今や大欺瞞者は、キリストがおいでになっただよに見せかける。地上のあちらこちらで、サタンは、黙示録の中でヨハネが述べている神のみ子についての描写に似た、まばゆく輝く威厳ある者として人々の中に現われる（黙示録 1:13-15 参照）。彼をとりまわっている栄光は、これまで人間の目が見たどんなものも及ばない『キリストがこられた、キリストがこられた』という勝利の叫びが、空中に鳴り響く。人々が彼をあがめてその前にひれ伏すと、彼は両手をあげて、キリストが地上におられた時に弟子たちを祝福されたように、彼らに祝福を宣言する。彼の声は柔らかく穏やかで、しかも美しい調べに満ちている。やさしい同情のこもった調子で、彼は、救い主が語られたのと同じ祝福に満ちた天の真理を幾つか述べる。彼は人々の中の病人をいやし、それから、キリストらしくみせかけながら、安息日を日曜日に変えたことを主張し、すべての人に対して、自分が祝福した日を聖とするようにと命じる。彼は、あくまでも第7日をきよく守り続ける者は、光と真理とをもって彼らに遣わされたわたしの天使たちの言うことを聞かないで、わたしの名を冒瀆している者だと宣言する。これは強力な、ほとんど圧倒的な感わしである。魔術師シモンに欺かれたサ

マリヤ人のように、多くの人々は、小さい者から大きい者にいたるまで、これらの魔術に心を奪われて、この人こそは『大能と呼ばれる神の力』であると言う（使徒行伝 8:10）。

しかし、神の民は欺かれない。このにせキリストの教えは聖書と一致していない。彼の祝福は、獣とその像を拝む者、すなわち、神のまじりけのない怒りがその上に注がれると聖書が断言しているその人々に対して、宣言されているからである」（大争闘下 398）。



インターネットでも  
ご覧になれます。

毎週の説教動画、セミナー等更新中。  
無料書籍も閲覧可能です。

サンライズミニストリー

検索

Online Sermons



facebook

Sunrise Ministry | Facebook

<https://www.facebook.com/srsministry?ref=hl>

YouTube

Sunrise Ministry | Youtube Channel

[https://www.youtube.com/channel/UC\\_MrvUj7GCW2yGpWmYNSGxA](https://www.youtube.com/channel/UC_MrvUj7GCW2yGpWmYNSGxA)

# 地震災害は何を意味するか？

及川 吉四郎

この先、人類の住処であるこの地球はいったいどうなるのか。

## はじめに

このたびの熊本の地震は、未だかつて見られなかったような形態のもので、被災者の方々は先が見えないだけにどんなにか不安な気持ちで、毎日をお過ごしのことかと思われまます。

日本の全国民も、何をどうすればよいのかわからず、気が気ではないというのが、正直なところかと思います。

地震には余震がつきものと思われてはいても、それが体に感じる地震が千回をはるかに超えるという、異常さにはどうしても不気味なものを感じないではいられません。

一体この地震はいつどういう形で終息するのか、皆目見通しがきかないありさまです。それをみると、この後、熊本にかぎらず、本土全体、いな地球自体が、近い将来、もっと大きな規模の大変動に見舞われることになるのではないかと考えないではいられなくなります。

それにしても、いったいどうしてこのような地震や津波災害などが起こるのか。

人間はこれまで、この問題について、いろいろな見方、考え方を示してきました。たとえば、

## 科学的な説明

まず、誰もが考えるのは、科学的説明というものでしょう。

こんにちには科学の進歩によって、地震災害の原因、理由、予測といったことまで、説明されるようになってきました。私が子供の頃は、地球の内部が硫黄のようなもの、溶岩のようなものが渦巻いていて、そこへ雨がしみ込み、それが熱して膨張し噴出する。その結果、火山が爆発して地震を起こす。陸地の火山の噴火がない場合でも、海底にも火山があって、同じ現象が起きるといふふうに思い込んでいたものでした。

しかし、いまはいろいろなことがわかってきています。地球はいうならば卵のようなもので、地球の内部は火の固まりであり、それが卵の殻のようにプレートで包まれる形になっている。しかもその殻がひび割れていて、ときどきその割れ目というか、断層が重なり合うことがある。そのときの変動によって地球の表面が振動する。それが地震と呼ばれているものだというわけですが、そうだとすると、われわれもみな、熊本の被災者と同じような有様で生活をしているということになりそうです。

それにしても、人間の住む場所が、どうしてこんなにも脆く不安定なのか、まして、この地球がいつかは、堅固で安定した生活の出来る場所になるものかどうかについては、科学は何も教えてはくれません。

## 宗教的な説明

科学はどうやら、今の現状についての分析や解明に

については、かなり、信頼できる説明をしてくれているのかもしれませんが、この地球の起源はどのようなものであったのかについては何も答えてはくれないようですし、まして、ひび割れた卵の殻が元には戻らないように、地球の将来が改良改善されるという明るい展望を示してくれるわけではなさそうです。

したがって、地球の未来や人生の不安について、科学は何の解決も与えてはくれません。

それでは、ほかに何かこの大問題に、明確な答えを与えてくれるものがあるのでしょうか。あるとすれば、それは宗教に期待するほかないようにも思われますが、その宗教自体、むかしはもちろん、こんにちはおおさら、人をたぶらかすようなことしか、していません。

## 東洋の宗教

東洋には種々様々な教えがありますが、なんといっても代表的なものは仏教ということになりましょう。その仏教は、この地球がどうしてこのようにブカブカなのか、その原因や理由について何か説明をしてくれているのでしょうか。まして、将来に対して何か希望的な方途を指し示してくれているのでしょうか。

せいぜい、因果応報の理論に基づいて、この世における幸不幸は、前世における善行・悪行の報いであるということしか説いてくれません。この因果応報の説は、言われれば「は、そうですか」と、かしこまって聞くしかありません。なぜなら前世のことは、個人としては誰も何も覚えておらず、反駁しようにも証拠を示すことができないからです。

しかし、仏教はもともと無神論であり、そのうえ無靈魂説の教えなのです。ですから、輪廻とか応報とかいっても、業（ごう）だけが輪廻して応報の受け手（死者の霊）が存在しない以上、何の輪廻か、何の応報か、わけがわからなくなってしまいます。

日本においては、災いの原因は、祖先の霊の祟りだとか障り（さわり）のせいだとかいいますが、これは因果応報説の仏教と祖先霊を祀る神道との習合によって造り出された欺瞞説としか言いようがありません。

## 西洋の宗教

では西洋の宗教はどのようなのでしょうか。

西洋の宗教と言えば、その代表的なものとして、どなたもキリスト教を考えられるに違いありません。し

かもキリスト教を代表する者として、法王を頭と仰ぐカトリックが念頭に浮かぶのではないのでしょうか。

しかし、カトリックをキリスト教とするのは、宗教学的分類のすることであって、内実的には、これはとてもキリスト教とはいえないものなのです。

なぜなら、本来キリスト教というのは、この世界の創造主なる神が、御子キリストを通してお与えになった教えのことをいうのです。

ところが、カトリックというのは、太陽を神とする異教ローマと合体し、習合した混交宗教なのです。その証拠に、天の神がお定めになった宇宙統治の憲法である神の律法＝十戒を、かつてに変更しています。

例えば、十戒の第一条に

「わたしのほか（世界の創造主）何者をも神としてはならない」

とありますが、ある法王は「わたしはこの地上において神の地位を占める者である」と公言しています。

十戒の第二条には、

「偶像を造つてはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない」

とありますが、カトリックでは、たくさんの偶像を造ってそれに、ひれ伏しています。そのためでしょう。カトリックは、神の十戒から、第二条を除いてしまいました。第二条がなくなっているのです。

さらに、十戒の第四条には

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。七日目（こんにちの土曜日）は、あなたの神、主の安息である。主は安息日を祝福して聖とされた」

とありますが、カトリックはこの第七日を、週の第一日である日曜日に変更しています。この日曜日は、ローマ世界において、太陽の神を祭る日として崇められてきていたものであったのです。この日を礼拝日としたということは、太陽を神として礼拝していることにほかなりません。

十戒の変更だけではありません。カトリックは、聖書にない教えをたくさん信じて教えています。たとえばマリア崇拜・靈魂不滅説・地獄や煉獄の教え、その他、聖書にはない、聖書と調和不可能な教えが数多く説かれています。これでは、神の教えキリスト教とは到底いえません。

.....

## ノアの洪水

最初この地球を大きく破壊した災害は、ノアの洪水と呼ばれるものです。この地球全体が水で覆われて地表のすべてが破壊され、荒廃してしまったのでした。その理由は何かということですが、聖書にこのように記されています。

「主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた」（創世記 6:5）

これで見ると地震や津波による災害は、科学的理由による自然現象というだけでは、ほんとうの説明にはなっていないのではないかと、ほかに何かもっと根本的な理由があることに気づく必要があるように思われませんか。

こんにち起こっている地震や津波は、長い目で見たとき、やはりこれは、ノアの洪水の余震また余波とも言えるのではないかと気がしないでもありません。

## 統計に見られる地震の現実

特に昔にくらべて近年に起こっている地震の数の多いことと、規模の拡大は、統計にはっきりと現れています。

破壊的地震の数を見てもみると、16世紀から17世紀にかけて1回であったものが、18世紀には6回となり、19世紀に入ると、なんと一年に1回に増え、19世紀の後半には年4回にもなっています。

米国の地震研究所の発表によれば、世界中の地震についてですが、紀元一世紀には35回であったものが、13世紀には115回、20世紀になると、驚くなかれ、22,772回となっています。

この事実をどう見るかですが、ある人はもちろん、これを単なる科学的自然現象と見るわけでしょうが、中にはこれを、何らかの予兆、または警告と見る人も少なくありません。

いまから2700年以上も前に、預言者イザヤは、このように述べています。

「その時あなたは深い地の中からものを言い、低いちりの中から言葉を出す。あなたの声は亡霊の声のように地から出、

あなたの言葉はちりの中から、さえずるようである。しかしあなたのあだの群れは細かなちりのようになり、あらゆる者の群れは吹き去られるもみがらのようになる。また、にわかにも、またたくまに、この事がある。すなわち万軍の主は雷、地震、大いなる叫び、つむじ風、暴風および焼き尽くす火の炎をもって臨まれる」（イザヤ書 29:4-6）。

ここに、神は地震をもって臨まれるとあります。すなわち、神はこれによって何ごとかを、人に告げ知らせようとなさる。のみならず、これらのことを手段として人間に働きかけられるということかもしれません。いわば、これらは神の摂理の現れということかもしれません。

## イエス・キリストによる警告

いまから二千年前、弟子たちは社会不安と世界の将来について、イエスに尋ねています。

「またオリブ山ですわっておられると、弟子たちがひそかにみもとにきて言った、『どうぞお話しください。いつそんなことが起こるのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終わりには、どんな前兆がありますか?』（マタイによる福音書 24:3）。

これに対してイエスは、つぎのようにお答えになりました。

「また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。注意していなさい。あわててはいけません。それは起こらねばならないがまだ終わりではない。民は民に国は国に敵対してたちあがるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである」（マタイによる福音書 24:6-8）。

## 苦難や災厄は産みの苦しみ

これは、特に現代に関わる預言であり、厳粛な警告です。これから、世に起こるさまざまな不幸や災いは、じつは産みの苦しみであるということです。しかもそれは、これまでの災難や苦しみを吹き飛ばしてしまうような、新しいものが現れ出る前触れであるということです。

聖書は、現在の苦難の原因を明確に説明しているば

かりか、このさきどうなるかについて、キリスト教以外のどんな宗教も与えていない答えを明確に示しています。

しかもそれは、暗い絶望的なものではなく、明るい希望的な解決の道をも指し示してくれているのです。いったいそれは、どのような解決なのでしょう。

アダムとエバが、神に背いたとき、横領されたこの世の統治権を、神がサタンの手から奪い返して、神のみ手に取り戻されるのです。それは世の終わり、キリストの再臨のときに起こることなのです。

そのとき、善と悪の大争闘、神と悪魔の大争闘は終わりを告げ、地上から罪と悪、不幸と災いが根絶されることとなります。そのとき、この地上はどうなるのでしょうか。

イエスの弟子ペテロは、キリストが復活されたとき、群衆にむかつてこのように告げています。

「このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならなかった」(使徒行伝3:21)。

アダムとエバの罪の結果、荒廃したこの地上に万物更新のときが定められている。十字架の死後、復活して昇天されたキリストは、そのときまで天にとどめておかねばならなかったという。そうすると、このキリストが再臨されることによって、万物の更新がおこなわれることになるわけです。

ところで、この万物の更新が行われるに当っては、新しいものが現れ出る前に、古いものが取り壊され、撤去される必要があります。そのため、たいへん言いにくいことではありますが、熊本の地震どころではない大変な変動が世界的規模で起こることとなります。

じつはそれを神から、異象によって見せられた人の記述があります。それをこの機会にぜひ、みなさんにもお知らせしておきたいと思います。これは、神の靈感を受け、異象を与えられて、その中で見た光景をありのままに描写したものです。そのことを念頭においてお読みください。

「神が、ご自分の民を救うためにその力をあらわされるのは、真夜中である。太陽がその力強い光を放って現れる。しるしと不思議とがあとからあとから現れる。悪人たちはこの光景を、恐れと驚きとをもってながめる。

一方義人たちは、自分たちの救いの前兆を厳粛な喜

びで迎える。自然界の万物は、それぞれの軌道からはずれたように見える。川の流が止まる。黒い厚い雲が現れて、互いに衝突する。この怒ったような天の真ん中に、一カ所言うに言われぬ栄光に満ちた澄んだ空間があって、そこから神のみ声が、多くの水の音のように聞こえてきて、『事はすでに成った』と告げるのである(黙示録16:17)。

その声が天と地とを振動させる。大地震が起こる。『それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった』(同16:18)。大空は、開いたり、閉じたりするように見える。神の御座からの栄光が、ひらめき渡るように見える。山々は、風に揺らぐ葦のように揺れ、ゴツゴツした岩があたり一面に飛び散る。嵐が近づいているようになり声がある。海は荒れている。強風のかん高い音が、破壊行為に従事している悪鬼らの声のように聞こえる。全地は海の波のように隆起して揺れ動く。地の表面は砕け散る。地の基そのものが崩れつつあるように見える。山脈は沈下して行く。人々の住んでいる島々が消えていく。

罪惡に満ちてソドムのようになってしまった海港は、怒った水にのまれてしまう。神は大いなるバビロンを思い起こし、「これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯をあたえられる」。

「一タラントの重さほど」の大きな雹が破壊の働きをしている(同16:19、21)。おごり高ぶっていた地上諸都市が低くされる。世の偉大な人たちが、自分に栄光を帰するために巨額の富を費やして建てた堂々たる宮殿が、彼らの目の前で崩れ去る。牢獄の壁は砕けて落ち、信仰のためにつながれていた神の民は解放される。

墓が開かれる。「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者は目をさますでしょう。そのうち永遠の生命にいたる者もあり、また恥と、限りなき恥辱を受ける者もあるでしょう」(ダニエル書12:2)。

第三天使の使命を信じて死んだ者はみな、栄化されて墓から現れ、神がご自分の律法を守った者たちと結ばれる平和の契約を聞くのである。『彼を刺しとおした者たち』(黙示録1:7)、キリストの死の苦しみをあざ笑った者たち、そして、キリストの真理とその民とに対して最も激しく反対した者たちは、栄光をまともなキリストをながめるために、また、忠実で従順な者たちに与えられる誉れを見るために、よみがえらせる」(エレン・ホワイト著「各時代の争闘」下巻414、415ページ)。

これをお読みになって、どんな感じをもたれたでしょうか。これは万物更新の時に、罪に汚れた地上の

ガラクタが一掃されるとき光景なのです。

しかし同時に、これはまた、神の支配を認め受け入れる人にとっては、世が新しくされるための産みの苦しみとして、これをながめることになるのです。

言うならば、新天新地の出現ということなのです。預言者ヨハネは、異象によってそれを見せられ、こう告げています。

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海（海は国と国、民族と民族を隔てている一切の隔離障壁）もなくなってしまった。また聖なる都、新しいエルサレムが夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた。『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとして下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである』。

すると、御座にいますかたが言われた。『見よ、わたしはすべてのものを新たにす。』また言われた、『書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである』（ヨハネの黙示録 21:1-5）。

## 聖書はおとぎ話か？

以上によって、なぜこの地上に災害が起きるのか、これから先どうなるのか。そして最後はどういう結末になるのか、そうした疑問に対する聖書の答えを示させていただきました。

みなさんは、これをお聞きになって、どんなふうに関心、また受け止められたでしょうか。残念ながら、日本人の多くは、霊の崇りとか障りとかは、なんの疑いもなく信じ受け入れていながら、聖書の教えを、単なるおとぎ話か寓話ぐらいにしか受け止めようとはしません。

しかし、これについて、上智大学のクローゼ教授は、日本人のこうした傾向について、きわめて適切な指摘と助言をおこなっています。

「日本では、聖書そのものは大いに普及しているが……知的な日本人は、西欧人に劣らず、批判的である。聖書を古代の神話と同程度に扱う傾向さえある。これは聖書の調査研究の成果が知られていないからであろう……日本人自らが証拠そのものを検分し、吟味することが望ましい。」

聖書のおしえが書きはじめられたのは、なにぶん三千五百年もの遠い昔のことです。文字がやっと作り出されたばかりの頃で、こんにちのような科学的・文化的・文学的用語などは存在しなかった時の表現法なのです。一見幼稚に見えても、内容は歴史的であり、現実的記録なのです。文字や表現法にとらわれて、これを童話のたくいとみなすことは、賢明な正しい読み方とは言えません。読者のみなさん方が、聖書の記述は歴史的現実的記述であることに、どなたも気づいていただきたいと切に願っています。

それによれば、地上における災害や不幸は、神に背いているこの世界に対するさばきの警告であるということなのです。

ただし、ここで一つの疑問がわいてまいります。災害が神の警告であることは認めるとしても、その際、善人と悪人が共に災害に遭遇するのはなぜなのかという問題です。これについての説明は、残念ながらここでは省略しなければなりません。なぜなら、これについては、かなり詳細な説明が必要になるからです。

もちろん善人と悪人は、当然区別されなければなりませんが、しかし、ここでただ一つ言えることは、善人も悪人も、おなじように、神に背き神から離れているという事実には変わりはないということです。たとい、善人といえども、神に背いている限り義人とは言えず、不義なる者と見なされるほかはないのです。

それにもかかわらず、ある人は、神の警告に耳を傾けずに罪の地上に留まり続ける結果、永遠の滅びを招き、ある人は神の警告にしたがって、やがて滅び行く罪のこの地上から即座に避難するでしょう。その避難先は言うまでもなく、神の統治したもう神の国、「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない」そうしたものがすべて消え去って、神のみこころの完全に行われる、新世界なのです。神はそこへすべての人を招いておられます。

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った。『神を恐れ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め（礼拝せよ）』」（ヨハネの黙示録 14:6、7）。

※ キリスト教講和「新天新地」神・仏・人・生死を語る 171号 16・6・1「新天新地を待ち望む会」

# 巡礼者たちの煩悶

金城 重博



## 完全論へのつまずき—煩悶から光明へ

永遠の神の御国を目指す巡礼者たちは、イエス・キリストを信じる信仰によって義認され、ゆるされているのに、聖書は罪から全く清められなければならないという目標も与えている。義認、聖化、完全のはざまでも多くの巡礼者たちが煩悶してきた。最後の真の教会 SDA に出会っても解決を見つけれないで信仰を放棄する人が少なくはない。しかし、解決は、イエス・キリストの贖罪の犠牲と大祭司の働きの正しい理解にある。十字架で始まったあがないと至聖所で完成される最後の贖いの理解にある。聖所に福音がぎっしり詰まっている。そこに、福音、すなわち、罪からの解放と回復がいつ、どのようになされるかを明瞭にしている最もすばらしい、調和のとれた神学を見出すであろう。「神よ、あなたの道は聖所にあり」（詩篇 77:13 欽定訳）。

## ジョン・バニヤンの煩悶：



欧米では聖書に次いで広く読まれている *The Pilgrim's Progress* 「天路歷程」という、ジョン・バニヤンの寓話作品がある。登場人物はクリスチャンという名。彼は永遠の神の都を目指して旅する。クリスチャンは、理想的なキリスト者の姿へ近づきたいとの思いと現実の中で煩悶する。それは、バニヤン自身の経験を描いている。

## マルチン・ルターの煩悶：



ルターも義を求めて煩悶した：「『わたしは、実に敬虔な修道僧であった。わたしは、言葉では表現できないほど厳格に、わたしの修道会の規則に従った。もし修道僧が、修道僧としての働きによって天国に行くことができるならば、わたしは間違いなくその資格があったであろう。……もしあれ以上続いたならばわたしは苦行の果てに死んでしまったことであろう』と彼は後に言っている。こうした厳しい苦行の結果、彼は衰弱し、失神の発作を起こした。そして、後になっても、それから完全に回復することはできなかった。しかし、これらすべての努力にもかかわらず、彼は心の悩みから救われなかった。彼は、ついに、絶望のふちに追いやられた」（大争闘上 143）。

## ウェスレーの煩悶：



「ウェスレーと彼の仲間、真の宗教は心に根ざすものであって、神の律法は、言葉や行為と同様に思想にまで及ぶものであることを悟った。外部の行状が正しいのと同様に、心の聖潔の必要を確信して新しい生活に入ろうと熱心に努めた。彼らは、非常な努力と祈りによって、生来の心の悪を抑制しようとした。彼らは、自己犠牲、愛、謙遜の生活を送り、彼らは何よりも望んだもの—すなわち、神の恵みを受けることができる聖潔—に到達するために役立つことはどんなことでも、非常な厳格さと正確さをもって実行した。しかし、彼らは、求めたものを得ることはできなかった。罪の宣告や罪の力から自由になろうとする彼らの努力はむなしかった。これは、ルターが、エルフルトの小部屋で経験したのと同じ悩みであった。『人はどうして神の前に正しくありえようか』という、彼の魂を悩ましたのと同じ問題であった（ヨブ 9:2）」（大争闘上 322）。

## 再臨運動の先駆者、ウィリアム・ミラーの煩悶：



「絶滅とは、冷たく冷え冷えした思想であった。そしてわれわれは、責任を問われて、みな死滅するのであった。天は、頭上にある真ちゅうのようであり、地は、足の下にある鉄のようであった。永遠—それはなんであろうか？そして死—なぜ死ぬのであろうか？…考えれば考えるほど、結論が出なくなってしまった。わたしは考えるのをやめようとした。だが、思いは自由にならなかった。わたしはほんとうに悲惨であった。…わたしはつばやき、不平を言った。…わたしは、悪が存在していることを知っていたが、善をどこでどうして見いだすかを知らなかった。わたしはもたえ苦しみ、なんの希望も持てなかった」(大争闘下3)。

## 再臨信仰に会ったE. G. ホワイトの煩悶：



「しかし私が最も心配したのは、キリストに会う準備についてであった。私は絶えず心の聖潔について思いめぐらし、何ものにもましてこの大いなる祝福にあずかり、かつ全的に神に祝福された事を身をもって知りたいと渴望した。…

心の苦悩は激しかった。時には一晩中目をつぶれない事もあり、(双子の)妹が熟睡するのを待ち、そっとベッドを抜け出しては床にひざまずき、言いつくせない苦悩を胸に静かに祈るのであった。永遠に焼き尽くす暗やみが私を恐れさせた。私はとてもこんな状態では長く生きる事は不可能だと悟った。だからと言って、死んで罪人の受ける恐るべき運命に会うのも恐ろしかった。神に祝福された事を自覚している人を、どれほど私はうらやましく思ったことであろう！…

『主よ、あわれんで下さい』とは私の願いであった。そしてあの哀れな取税人のように天を仰ぐ事もできず、床に顔を押しつけるのであった。このようにして肉体も力も非常に衰えてきたが、依然として苦悩と絶望は去ろうとしなかった」(ホワイト夫人略伝 11-12)。

## 初期再臨運動の信徒の煩悶：



### 大失望の前後—「それでも」

1844年にキリストが再臨なさると待望していた信徒たちは、主の「焼きつくす火」の前に罪があつてはならないと、最善を尽くして、愛する主に会うためにすべての罪を捨てて

聖潔を渴望して準備した。彼らは明日、明後日と再臨があるとの期待を持って1844年の再臨を待った。「聖徒たちは、至るところで、厳粛で熱烈な祈りの精神を感じた。聖なる厳粛さが彼らの上に宿った」。しかし、主は来られなかった。その失望はあまりにも大きなものであった。

「我々の最も甘い(黙示録 10:9 から取られた表現 - 蜜のように甘い)希望と期待は吹き飛ばされた。…我々は世の明けるまで泣いて泣き崩れた…」

それでも忠実な真の証人であられる主を渴望した。

「けれども時間が過ぎるにつれ、エドソンの頭脳をよぎるのは、再臨という希望を持って以来、神がすでに彼をどれほど祝福して下さったか、神のいやしの力が与えられたか、どれほど彼の生涯を変えてくださったか、驚くべき平安をもって楽しませてくださったかを回顧すると、確信が戻ってき始めたのであった」(Tell it to the World, C. Mervyn Maxwell, p48)。

「天使たちは、深い関心をもってメッセージの結果を見守り、それを受け入れた人々を高尚にし、この世のものから彼らを引き離して、救いの泉から豊かな供給を得るようにと導いていた。その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた。しかし、彼らは、ふたたび悲しい失望を経験しなければならなかった」(初代文集 393)。

それでも主と真理を求める者たちに、主はお答えになった。

「わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが**至聖所に入る時に、彼らはイエスを見出して、新たな希望と喜び**を味わうのである。わたしは、彼らが、過去を振りかえって、イエスの再臨の宣言から1844年における時の経過に至るまでの、彼らの経験を回顧しているのを見た。彼らは、彼らの失望が解き明かされて、ふたたび喜びと確信に活気づけられた。第三の天使は、過去と現在と未来を照らした。そして、彼らは、神が不思議な摂理によって、彼らを導いてこられたことを知るのであった」(初代文集 414)。

## SDA 再臨待望者の煩悶：

再臨運動の後期に我々が入った。セブンスデー・アドベンチストの多くの者が焦燥、煩悶の中にいる。

律法主義と自由主義の狭間で「多くの者は、イエス

を見失った」(TM 91, 92)。聖書と証の書が、イエスのごとき品性に到達していなければならないという理想、目標を掲げているにもかかわらず、「非常に高潔な状態に到達」すべき事と自分の無力さの間で煩悶しているのである。

## 及川吉四郎牧師の完全論についての煩悶：

「人類救済の神の計画とその象徴的模型としての聖所」に、ある SDA 夫人のことが書かれている：

「かつて、ある教会の草分けであった一夫人も、彼女の聖書理解が聖化の領域にとどまり、そこから抜け出ることができなかったため、この教会の信仰に、挫折をしてしまったということがありました。

この方は、教会の大黒柱のような存在でした。あるとき、市内でキリスト教講演会を開催中のこと、講師の牧師が講演中、突然腹痛を訴え講演をつづけることができなくなりました。そのとき、この夫人は即座に、牧師に代わって講壇に立ち、牧師の講演の後を継いで話を続け、無事にその晩の講演会を終えたということがあったそうです。

この方のご主人は、医科大学の教授であり、毎週安息日には、礼拝の時間に間に合うよう大学からタクシーで教会に乗りつけ、礼拝に出席し、礼拝が終わると、またタクシーで大学に戻るという生活がつづいていました。そんなわけでバプテスマは受けていませんでした。これが、夫人にとっての大きな悩みであったようです。

ところが、大学受験を控えた息子さんのために、ある大学生を家庭教師として迎え入れたところ、それがたまたま熱心な無教会の会員でした。夫人はその学生から、『われわれはキリストの十字架によって律法から解放された。これが福音の神髄なのだ』という主張を聞いて目が開かれ、律法遵守のこの教会の教えに疑惑をいだくようになりました。その原因は、ご主人の救いの問題にあったようです。

『うちの主人はとってもいい人である。こんないい人が安息日を完全に守ることができないために、バプテスマを受けることが出来ない。バプテスマを受けられないということは、救われないということにほかならない。こんないい人が、律法を完全に守れないために救われないということがあっていいものか？』

この疑問が、ついにそれまで、絶対の信頼をおいていたホワイト夫人の証の書に対する不信へとつながっていったようなのです。

わたしがその教会に赴任したのは、彼女が他教会に移ってからのことでしたが、それでもと思い、ある日

訪問してみました。そのとき、彼女が言われるには、『セブンスデーの教会は律法主義的信仰で、福音の教えではない』ということでした。そしてこうも言われました。『たとえば証の書によれば、われわれの信仰生活においては、時間を一時間、いな一刻でも無駄にすることがあってはならない。それは罪になるとあるが、これはどう考えても、聖書の教える福音信仰とは違うと思う』というのです。

彼は、ご自分の体験、すなわち、義認、聖化、完全についてどれほど悩んだか、ご自身の体験を記している。SDA 教会に混在する罪、キリスト、完全についての神学の荒波の中でどれほど煩悶したかを書いている。このような聖潔を求める煩悶は、聖霊が働いている証拠である（国と指導者下 195 参照）。

下記に引用しよう：

## 完全についての聖書の教え：

「あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ 5:48）。

「愛する者たちよ。わたしたちはこのような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなるうではないか」（第二コリント 7:1）。

「最後に、兄弟たちよ。いつも喜びなさい。全き者となりなさい」（第二コリント 13:11）。

「わたしたちすべての者が神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至らせるためである」（エペソ 4:13）。

「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのない者にして下さるように。あなたがたを召されたかたは真実であられるから、このことをして下さるであろう」（第一テサロニケ 5:23, 24）。

「だから、なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい」（ヤコブ 1:4）。

## 証の書も完全についてはっきりと教えている：

「クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである。人の子キリストが、その生活において完全であられたように、キリストに従う者も、その生活において完全でなければならない」（『各時代の希望』中巻21ページ）。

このように、聖書には確かに、完全の標準が示されており、その達成が求められています。しかしそれは、決して容易でないと感じ、むしろ不可能であるとさえ、思っている人がほとんどではないでしょうか。

そのため、学者たちの多くが、この完全についていろいろな説明をこころみしています。

たとえば、植物の成長において、苗は苗としての完全があり、つぼみはつぼみとしての完全があり、花は花としての完全がある。それと同じく、人間も幼児は幼児として完全でありうるし、少年は少年として、青年は青年としての完全があるはずだ。そのようにクリスチャンとしての成長も、各段階ごとに完全であることが出来るという説明もあります。

これは相対的完全ということになりましょうか。完全がこのような意味であれば、容易に理解もでき、納得もできます。けれども、成熟また達成の意味での完全となるとどうでしょうか。

なかには、到達達成という意味での究極的完全は人間には不可能と考へ、聖書の言う完全は、愛の完全をさすとか、服従の完全、あるいは神との関係の完全を言っているのだという人もいます。

しかし、愛の完全と言われても、愛は無限であってどの程度なら完全といえるのか、服従についても同様、やはり、これでよいという、達成感、安心感、満足感を得ることは、かならずしも容易なことではないように思われます。

そもそも完全という言葉自体どういうことを指すのか、明確にすることは不可能ではないかとさえ思ってしまう。

正直のところ、わたしも、聖書や証の書にある「完全」という言葉が、ほんとうはどういう意味なのか、具体的にどういう状態を指すのか、今もってつかみきれていません。聖書のいう「完全」とは行為の完全なのか、心意の完全なのか、品性の完全なのか、心底わかりかねているのが実情です。

イエスは「神のほかに善きかたはない」といわれました。完全なかたもただ神おひとりのはずです。そのように、地上に完全な人はいないのでから、完全とは何がわからないのは、当然というべきかもしれません。

## わたし自身の過去の体験

実をいいますと、この問題についてはわたし自身も、神学生のときから、ずいぶんと悩みつづけていたことを率直に告白しなければなりません。



われわれが天国に入る者となるためには、品性に「一点のしみもしわもあってはならない」という「証の書」の言葉が、そのころの安息日学校の教科や、祈祷週読み物などに頻りに引用されていたからです。

そのためにわたしは、深刻な認罪感にさいなまれ、なんとか清められたいという一心で、クラスにもでないで、松林に飛び込み、何時間も祈り続けたりもしました。それでも心は安まらず、ついに一週間の断食を決行することにしました。

何分食料事情の悪いときでもあり、体力的に度を越す、無茶な企てであったためか、夜中に突然、呼吸困難に陥ってしまいました。

寮の同室の友人が、あわてて医務室に飛んで行き、看護婦さん呼んできてカンフル注射をしてもらい、危機を脱することが出来たといったありさまで、心ならずも、はた迷惑な人騒がせをしでかしたりもしました。

翌日、舎監室によばれて国平四郎先生から、事情を聞かれましたが、そこでわたしは、自分の現在の心境をありのままに申し述べました。なにか忠告でも受けるのかと思っていましたところ、先生は終始黙って聞いておられましたが、やがてハンカチを取り出して、目頭を拭きながら「からだをこわすといけないから、もう無理をしないように」と、一言いわれただけで帰されました。

その後、山形俊夫先生からも、洗足式の場で呼び止められ、先生はわたしの肩に静かに手を置いて、「あなたについてはなしは、わたしも聞いているが、この問題は、ときがくれば自然にわかるようになるものだ。焦らずに、神にお任せするように」と一言、助言をいただいたりもしました。

さらにホフマン先生も、宣教師館にわたしを招いてくださって、懇切な助言をいただきましたが、もちろんそれで解決がえられたというわけではありませんでした。

ただこの問題は、自分で自分を苦しめることによっては解決できることではないということだけは、

どうにかわからせてもらったように思われました。

それからしばらくしてからのことですが、礼拝説教の中で、ある説教者が引用された一つの聖句に、わたしの心は強くひきつけられたのです。それは、神が直接わたしに語りかけてくださったみ声のようにも思われ、その聖句はわたしの心に深く刻みつけられることになりました。

それは次の聖句です。

「そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」(マタイ 18:14)。

この聖句によって、何はともあれ、わたしは自分のような者でも、神から見離されたり、見捨てられたりすることはないのだ、と思えるようになりました。

教職についてからも、自分の無力さと品性の汚れのために、自分はこの働きに相応しくないのでは、と思うことがしばしばでしたが、そのたびに、この聖句が頭に浮かび、これが支えとなって、こんにちまで、教会の働きをどうにかつづけて来ることが出来たように思います。

しかし、この品性の汚れや欠陥、これがある限り、神は決して是認なさないのでは、という懸念、不安、これはその後も消えてなくなることはありませんでした。

## これは人間には理解しえない問題なのか？

しかも、これはわたしひとりの問題かと思っていたところ、いつか牧師の会合があったさい、「救いの確証」の問題で、ある四十代の先輩牧師の口から、思いもかけず、つぎのように問いかけられました。例の「証の書」には「『しみやしわのたぐいのものがひとつでもあってはならない』とあるが、これはいったいどう理解したらよいものだろうか、あなたは思うのか」というものでした。

それを聞いてわたしは、「この問題はわたしだけのことではないんだな」と思いながら、ちょっと言いよどんでいる間に、その方は「どうせ聞いても明白な答えなど、だれからも得られようはずはない」と思われたからでしょうか、わたしの答えを待たずに、その場を静かに去って行ってしまわれました。

このことがあって、わたしは、わが牧師たちのあいだでは、どうやらこの問題は、なんとなく心に引っか

かりながらも、おたがい、あからさまにとりあげることを、意識的に避けているのかも知れない、と思ったものでした。

ところで、当時の牧師たちが、この問題を避けて触れたがらなかった背景には、次のような事情があったのかも知れないと、後で気づくようになりました。

それは、二〇世紀前半、神学院の教授であり、行政面でも重きをなしていたM・L・アンデレアセンという神学者のことです。この方は、わたしの恩師の一人プリンコ教授自身、自分が最も尊敬する学者のひとりとして、挙げておられたほどの方です。

このアンデレアセン教授の神学論の主要点は、終末論的神学と言われるものですが、最終世代の神の民は、「キリストが人間として完全であられたように神の民も品性と行いが完全でなければならない」というものであったようです。その根拠として引用しているのが、聖書の聖句とともに、エレン・ホワイトの次のことばなどです。

「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである」(キリストの実物教訓 47)。

そして、キリストは墮落後のアダムと全く同じ姿で受肉され、しかも、罪のない完全な生涯をおくられた。だから、われわれも彼を模範として、品性においても生活においても、完全にならねばならないし、なりうると主張していたようなのです。

しかし、この主張は、人々に大きな影響を与えましたが、同時に多くの学者たちの反発を引き起こすことにもなったようです。それは、「われわれが救われるためには、だれもが完全にならねばならない」という点が問題とされたのでした。

『人間が完全になることなどありえないことであり、このような説は、多くの信徒たちに絶望感を与えるだけだ』ということで、他の学者たちからはげしい批判を浴びせられたようなのです。

そのため、この学者は狂信的異端者扱いされて、学者名簿から名前が除かれてしまったとのことでした。

しかし、このアンデレアセンの主張は、実は聖書の聖句と、ホワイトの「証の書」を拠り所としての主張であったのはたしかだと思われまます。わたしなども、聖書や「証の書」を素直に読むかぎり、どうしても同じように読めてしまうのです。そして、そのように読み受け取るのは、自然であり当然ではないのか、とさ

え思われるのです。

それにもかかわらず、アンデレアセンの主張に対する学者たちの批判の焦点は、どういうところにあったのかといいますと、一番の問題点は、彼がクリスチャンの完全について語る場合、どちらかというと、神の恵みのわざのほうよりも、人間の品性や行為のほうに重きを置きすぎるといふ点にあったようです。

もちろん、アンデレアセンとしては、行為に重きをおいたと言っても、それは当然「キリストにたいする信仰により、キリストにあって」、ということであったにはちがいません。

けれども、それを聞いたり読んだりする、いわば受け取る側の者としては、どうしても、自分の品性なり行為なりのほうに、注意が向けられるようになるのは、避けがたいことのように思われるのです。

そこで、この問題の根本原因はどこにあるのかといえば、聖化論を義認論から分離して、別個に論旨を展開していることにあるのではないかと思われるのです。義認論は義認論として、すでにもう仕上がっている教義として、一先ず棚の上にあげておき、それとは別のテーマとして、聖化論だけを対象に議論を展開しようとしたためではないのか。そうすると、どうしてもこれが落とし穴となって、そこに落ち込む危険があるように、わたしには思われるのです。

義認と聖化は、区分はできても分離はできません。この二つは密接につながっていて、しかも聖化は、義認の延長線上にあるテーマなのです。

## 義認も聖化も贖罪論という檻の中の問題

さらに詳述すれば、これらはすべて、贖罪論すなわち、「信仰による義」という大前提があり、これは神の恵みという囲い、別言すれば、神の牧場の中に設けられている羊の檻のようなものといえます。そして、義認も聖化も、同じ「信仰による義」という囲い（檻）の中のことがらにほかならないということなのです。

救い主キリストは、十字架というあがないのわざによって、失われた罪人を集め、これをかくまうために、かつての「逃れの町」（申命記 19 章参照）同様の囲いを張り巡らされました。これは羊飼いが群れをサタンから守るために設けた、檻のようなものです。

そこで、義認は、いわば檻の外にいる羊たちをどうやって檻の中に迎え入れるかの問題であり、聖化は檻の中に迎え入れた羊たちを、どうやって、イエスなる羊飼いに慣れさせ、信頼させ、その導きに従順に従い、

ほかの羊たちとうまく歩調をあわせ、同一行動をとれるようにするか、そのための訓練期間が、聖化の過程ということになるのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

多くの人が聖化の教えにつまずく理由は、やはり聖化の目標である完全に到達することなど、自分には不可能だという抵抗感や絶望感が、先に立ってしまうことにあるように思われます。その結果、この問題の理解を、ともすれば義認前の「行いによる義」に、逆戻りさせてしまうようになるのではないかと、思われるのです。

生来のわれわれは、救われるための条件として、もともとだれもが、行いによる義によりかかろうとしがちなのですが、しかし、それは不可能だと悟って、神の恵みによる救い、信仰による義の教理を受け入れて、信仰にはいったはずではなかったでしょうか。

ところが中に入ってみると、そこには、やはり神の律法があり、信者としてのさまざまな生活規範というものがあります。しかも、これを忠実に守り行おうとすれば、とかく信仰よりは、行いのほうに心が向けられ、力が注がれがちになります。

その結果、この教会のおしえは、信仰、信仰とはいっても、救われるためには、結局のところ、最後にはやはり、行いが救いを決定することになるのではないのか、ということになって、救われた者としての喜びなど、いつの間にか消し飛んでしまっているということになりかねません。

そこで、問題は聖化をどう理解するかということなのです。

※ 義認、聖化についての正しい理解の必要に触れ、そして完全論に突入される。近代どのように完全論否定説が入ってきたかを説明される。

## 完全論否定説

著名な神学者エドワード・ヘッペンストール博士や、テイラー・バンチ、ラルフ・ワッツのような人々は、聖化に関して、われわれ人間は、この地上で完全に達することはないと、説いています。「われわれが完全になれるのは、この肉体が栄化されるキリストの再臨のときである」というのです。これは殆どの人が同意している考え方ではないかと思われるのですが、エレン・ホワイトは、これに対して真っ向から反対のことを述べています。

『キリストがおいでになる時、我々の卑しい体は変えられ、彼の輝かしい体のようにされる。しかし、その卑しい品性は、その時清くされることはない。品

性の改変は彼が来られる前に起こらねばならない』(OHC278)。

『キリストが来られるその時に、我々を罪から清め、品性の欠陥を除き、あるいは我々の気質や性癖の弱点を直してくださるのではない。もしそういうことが我々のためになされるとすれば、その時が来る前にすべて完成しているのである』(2T355)。

これで見ると、ホワイトは「キリストの再臨の時に変えられるのは、朽ち行く肉体であって、品性ではない。品性の改変、罪のない完全は、キリストの再臨の前に成し遂げられていなければならない」というのです。

しかも、それだけなら、学者たちの方がまちがっているのであろうと思えば、それですむことですが、やっかいなことに、ホワイトは、「完全な品性はキリストの再臨の前に成し遂げられていなければならない」といわれる。しかもそれは、「恩恵期間が終了するまでは、それに到達することはない」ともいわれていることです。

『人は恩恵期間が閉じるまで、キリストにある完全という最高の高さに到達することはない』(4T367)。

このわかりにくい問題の解決の鍵は、どうやら恩恵期間というものが何を意味するかにかかっていることになりそうですが、残念なことにわたしは長いこと、これについてあまり深く考えることをしてこなかったように思います。

『あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい』(マタイによる福音書 5:4,8)。

これも、「神が神として完全であられるように、人も人として完全でありなさい」という意味だと説明されると、「あ、そういうことか」と、いちおう納得できないわけでもありませんが、しかし、たといそれが人としての完全であったとしても、現実問題として、はたしてそれは可能なことなのだろうか、という疑問が頭をもたげてきます。

成長過程の各段階における相対的完全なら納得できても、目標到達の意味における完全となると、思わずそこに立ち止まり、足が釘付けになったように、そこから一步も動けなくなってしまいます。

そのためもあってでしょうか、多くの学者たちが、あれこれの説明を提供してくれています。しかし、いちいちそれを紹介するわけにはいきませんので、一、二の例を挙げるだけにとどめますが、聖書のいう完全とは、これは品性の完全であって、性質の完全のことで

はないとか、地上の人間に、罪のない完全などというものはありえない。聖書はそういうことを言っているのではない、これは成熟とか、神との関係の完全を意味するのだ、といった説明などです。

また、こんな説明もあります。もし地上で完全に達した人がいるとしたら、その人は、もはや仲保者としてのキリストの必要はなくなるではないか。そんな神なしの完全人など、考えられもしないというものです。

われわれはとかく、初めはそのつもりでなくても、信仰生活に慣れてくると、それまでキリストを仰いでいた目を、自分の足下、すなわち行いのほうに目を向けるようになりがちです。その結果、これをしなければ救われないのでは？あれをしなければ滅びるのではないか？といった恐怖心や不安感が先に立って、とかく感恩報謝の奉仕とは異なった利己的打算的動機に支配される信仰の生活に逆戻りしがちなものなのです。

たとえば、われわれは日ごとに罪を犯しつづけているのだから、日ごとに義認される必要がある。しかもこれは一生続くことであるともいえる。その意味では、聖化こそは一瞬のわざであるというべきではないかというものです。(たとえばジョージ・ナイト教授のように)

実を言うと聖化の問題について、わたしはここで完全に行き詰まってしまったのです。

何よりも、エレン・ホワイトがわれらに示している標準は、極めて高いものであることです：

「神がご自分の子らに望まれる理想は、人間の最高の思いが達することのできるよりもっと高い。『それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい』(マタイ 5:48)。クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである。人の子キリストが、その生活において完全であられたように、キリストに従う者もその生活において完全でなければならない」(「各時代の希望」中巻 20 頁)。

「キリストがおいでになる時、我々の卑しい体は変えられ、彼の輝かしい体のようにされる。しかし、その卑しい品性は、その時清くされることはない。品性の改変は彼が来られる前に起こらねばならない」(OHC278)。

そういうわけで、この問題については、いわば袋小路に追い込まれたように、八方塞がり、それこそ完全に行き詰まってしまうことにならざるをえません。

※ 及川先生を煩悶から希望へ、暗黒から光明へ導いたのは、天の聖所にいます大祭司としてのイエスを見出したことにある。象徴的模型としての聖所は三つの区分に分かれていた。第一区分の外庭、第二区分としての聖所、第三区分としての至聖所に、煩悶から脱出する鍵を見出した。

## 完全は、第一区分、第二区分の聖化の過程では得られない！

だが、そこでふと気づいたことは、どうやら自分はこれらのことを、聖所の第二区分に当たる「聖所」が象徴する聖化の過程また領域だけで、答えを見つけ出そうとしていたことに、根本的な問題があったのではないかということでした。すなわち、義認に続く聖化の過程また領域には、所詮、答えの得られようはずがないのです。なぜなら、聖化はどこまでも、過程的路上の途中であって、到達点ではないからです。

ですから、贖罪の計画の目標、また到達点について知ろうと思ったら、栄化への準備過程とも言うべき、次の領域でそれを学習するようにならなければならないわけです。

この点について、エレン・ホワイトは、神から異象を与えられ、次のように述べています。

「第三の天使は、彼らを至聖所に導いた。そして、過去のメッセージの経験を経た人々も、彼らを天の聖所へと指差していた。多くの人々は、天使たちのメッセージの中に完全な真理の連鎖を見、喜んでその順序に従って受け入れて、信仰によってイエスに従い、天の聖所にはいったのである。わたしは、これらのメッセージが、神の民の錨であることを示された。それを理解して信じている人々は、サタン多くの欺瞞に押し流されないように、守られるのである」（「初代文集」417頁）。

どうやらこのわたしも、神のあわれみにより、かろうじて聖霊またみ使いの指し示す至聖所に目が開かれ、これまで終始していた聖所から第三区分としての至聖所に導き入れられたということになるようです。

これによって明らかなことは、イエスは前の部屋、すなわち聖所の働きを終えられて、今はもうそこにはおられないということなのです。

それにもかかわらず、わたしは長いことそれに気づいていなかったようです。そのため、つぎのホワイトの言葉は、わたしにとって譴責にも等しいものとなりました。

「第一天使の使命を拒んだ者は、第二天使の使命からも益を受けることができなかった。夜中の叫びによって、人々は、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る準備をなすべきであったが、その夜中の叫びも役に立たなかった。初めの二つの使命を拒んだために、理解力の暗くなった彼らは、至聖所に至る道を照らしている第三天使の光を見ることができなかった。名目的諸教会は、ユダヤ人がイエスを十字架につけ、そのために彼らは、至聖所へはいる道を知らず、そこにおられるイエスの仲保の恵みを受けることができないことをわたしは見た。彼らは、無益な犠牲を捧げていたユダヤ人のように、イエスが去ってしまった部屋に向かって、彼らの無益な祈りをささげている」（「初代文集」423、424頁）。

もちろんこれは、待望していたキリストの再臨がなかったため、失望に陥っていた人々について述べていることですが、正直言って、わたしも長いこと、そのような信仰者の一人であったわけです。しかし、これはわたし一人だけのことではなさそうです。わたしがようやく、そこから脱することができたころのことです。

## 第三区分—至聖所

ともかく、真の福音は、型としての聖所の第二区分にはなく、第三区分の至聖所にあることに注意を向ける必要があることを、わたしは声を大にして申し上げたいと思います。

ですから、信仰の仕上げともいえるべき、完全の問題について結論的な答えを得たいと思ったら、本当は第三区分に当たる「至聖所」において、それを求めるべきであったのです。

ところが、実際問題として、第二区分に当たる聖化の問題に対して、義認同様の注意と関心をはらっている人であっても、もしかしたらそこだけに留まって、第三の区分に当たる至聖所のことは、すっぱり抜け落ちているか、すくなくとも置き忘れていているというのが、実情ではないのかどうかです。

もし、そうだとしたら、その人の贖罪に関する信仰と使命は、尻切れトンボのような未完の信仰、目標を見失った中途半端な使命に終わってしまうことになりかねません。…

ところで、われわれの成長・聖化の仕上げ、到達点としての完全は、果たして可能かどうかですが、聖書を見ても証の書をしらべても、成長の目標・到達点は、成熟・結実・完全であることは明らかです。しかしわれわれ罪人が、完全の域に到達することなど、到底不可能であることは否定できません。

……

問題は、いつ完全になれるのかということです。多くの学者を始め、ある人びとは、キリストの再臨の時に完全な者に変えられるものと、期待しているようです。だいたい殆どの人は、漠然とそんなふうに思っているのではないのでしょうか。

中略…

しかし、私は理論的にはこんなふうに考えられうるのではないかと思います。

1. まず何よりも、天国は罪のないところなのだから、罪を持った人はだれひとり、そこへ入ることは出来ない。天国にはいるためには、だれもが完全な品性の持ち主となっていなければならないはずではないのか。
2. キリストの再臨直前に、七つの禍い、とくにヤコブの悩みがあるとされているが、それは恩恵期間が閉じられたあとのことなので、キリストの執り成しは終わっている。とするなら、罪なく完全な者でなければ、そのとき神の前に立つことが出来ないのではなかろうか。
3. 多くの人は、キリストの再臨の時に、完全な者に変えられると考えているようであるが、もしそれが可能であるのなら、たとえば再臨前の恩恵期間のあいだにおいても、それは可能なはずではないのか？

事実、サタンの試みに勝利し、神の印を受け、後の雨を注がれた人は、恩恵期間の終了直前に、罪も消し去られているのだから、その人はすでに完全な者とされていると考えていいのではないのか。

要は、この地上においての完全到達、完全達成は、現実問題として果たして可能かどうかでしょう。

これからわたしが申しあげることが、どこまでも、仮定的推論にすぎませんので、これは絶対に正しいことだから、あなたもこのとおりに信じるべきだなどというつもりはありません。

けれどもわたしは、この地上においても完全ということはあることではないかと考えます。その必然性について、たとえばこんなふうな考え方はどうでしょうか。

1. 証の書に、神性と人性が結合することについていわれているが、それがこの世で実現するというのであれば、その人性は罪のない完全な状態にされているはずではないのか。人が罪を持ったままで神性

と結合したり一体になったりするなどということは、到底考えられないことだからである。

2. 聖書には、キリストと教会の結婚のことが記されている。その場合、教会が罪を持ったままで、キリストと結婚できると考えることはとてもできない。やはりこれは、教会の無傷、信者の純潔、完全を前提としなければ、このような結婚はありえないことではないのか（マタイによる福音書 25 章、エペソ 5:26,27 参照）。
3. 教会には、キリストの再臨の前に、後の雨すなわち聖霊の降下が約束されている。

その場合、教会はもちろん、信者一人びとりが、聖霊の充満を受けたとして、それでもなお、罪を持ったままの不完全な状態でありつづけるということが、果たしてありうるものであろうか。やはり聖霊の充満それ自体、その人の品性は完全な状態になっていると考えるほかないのではないか。

4. 神のみわざ完結に当たって、神に忠実に従った者に神の印が捺されると告げられている。この人々は天国への候補者なのだから、しみもしわもない純潔で完全な人びとであるにちがいない（黙示録 14:1-5）。

このように、理論的に考えるかぎり、キリスト再臨前の完全は、ありえないことではない。いや、ありうることだし、当然なければならないはずである、ということになるわけですが、あなたはこれについてどう思われますか。

## 問題解決の鍵は至聖所にある



しかし、そうはいつでも現実問題、実際問題として、これについてはやはり二の足を踏まざるを得ないのが正直なところ。この自分が罪なき完全になることなど、どう考えても自信がもてないからです。

それなら、なぜわたしが聖所の第二区分に当たる、前の聖所によって象徴されている聖化の過程・領域に留まって、そこから先に進もうとしなかったのか、ということですが、それは第三の区分に相当する至聖所によって象徴されている過程・領域の中で説かれている聖所の清めに関し、次の点が心のひっかかりとなっていたためです。

「天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれ

なければならない。・・・この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである」（『各時代の争闘』下巻 141 頁）。

これがどうしてひっきりになったのかと言いますと、もちろん証の書に対して疑問をもっていたためではありません。そうではなく、当時、聖書のあるテーマを極端に取り上げて主張し、教会員の信仰を扇動したり混乱させたりしていると言われたプリンスミード問題がありました。この人の教えが日本にもやってきて影響を及ぼしつつあるので、惑わされないよう用心するよにとの上司からの注意もあって、異説に対する警戒心が強くはたらいっていたことがあったように思います。

すなわち、「天において罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別の働き、すなわち罪の除去が行われなければならない」という、こここのところを、いわば、かつて異端とされたアンデレアセンの主張と同じく、人間の努力による品性また行為の完全を主張する思想にちがいないと、早とちりしてしまっていたためと思われる。

そのこともあって、神が天の聖所をきよめる働きをなさっている間、それにあわせて、地上の人間一人一人も、品性や行いにおいて完全にならなければならないという考え方は、極端であり、現実的ではないという思いを払拭することができなかつたのです。それまで聖化の問題でさんざん苦しんできたこともあって、至聖所の問題については、異なった解釈の影響に対する警戒心から、意識的に深入りを避けてきたということがあったように思います。

中略……

しかしこれは、贖罪の計画の模型、クリスチャンの信仰生涯の象徴である聖所について思いめぐらす時、そこには明確な解決と答えがあることに気づかされるのです。それはどのような答えでしょうか。いうまでもなく、聖所の清めという大祭司の最後の奉仕に、最終的な解決が与えられているのです。

いったい聖所の清めとはなんでしょう。それは何千年にわたって、われら神の民の罪が、キリストの十字架の血によって赦され、その罪が聖所に移され、そこに置かれてきた。その罪が大祭司キリストの最後の贖いのはたらきによって、いっさい聖所から運び出されて、サタンに背負われる。その結果として聖所が清められるとき、同時に神の民の罪も、拭い去られ消し去られて、跡形もなくなってしまうというのです。こうして、われらは罪のない完全な者とされるはずなのです。

これはたしかに、**義認の場合とおなじように、神の**

**一方的な恩寵のわざによる**のです。しかし、だからといって神のみわざが、たとい神の一方的恩寵によるものであるとしても、神はそれを強制はなさいません。なぜなら、人間は自由意志を与えられた人格的道的存在であるからです。ですから神は、人間のためになさるみわざには、すべて人間の同意と協力を必要とされます。すなわち、くびきを共に負うことを期待し求めておられるということです。

「この贖罪は、生きている義人とともに、死んだ義人のためにも行われる。これはキリストを信じて死んだすべての人を含んでいるが、彼らは神の戒めに関する光を受けなかったために、知らずして戒めを破って罪を犯したのである」（『初代文集』415 頁）。

聖所のきよめにおいては、生きている者だけではなく、死んでいる者たちにも適用され、われらと同じようにあらゆる罪がきれいに拭われ、消し去られてしまうというのです。

意識のない死人の罪をも消し去るということは、神だけがなしうることであり、しかも、これこそはまさに 100 パーセント神の恩寵による賜物以外の何ものでもないという、何よりの証拠となるものではないでしょうか。

このように、神はわれらの罪をすべて消し去って、はじめから存在しなかったもののように処理してくださいというのです。

さてイエスの聖所の清めのわざ、これはイエスだけが負われるわざであり、イエス以外のだれも、これをなし得る者はいません。けれどもわれわれ人間には、自分でなければ出来ない役割もあるのです。それはなんでしょう。

これはイエスにもおできにならないことなのです。それは、われわれが自分の罪の重荷を、自分の意志と決断で聖所に持ち込むことです。

型としての地上の聖所における働きを説明…中略…

## 「最後の贖い」は罪の除去

このように、罪を隠して神に告白しない者は、その罪が赦されず消されないが、罪を認めて悔い改め、神の前に告白して赦しを請うならば、聖所のきよめによってその人の罪も清められ、どんな罪も綺麗に拭い去られ、消し去られてしまうというのです。結局、われわれの運命は、一切の罪を神に対して告白し赦しを求めるか否か、聖所に持って行って大祭司なるキリストに、罪の転嫁を引き受けていただくかどうか、そのことにかかっていることとなります。もちろんイエスは喜んでわれらのすべての罪を引き受け、ご自身の流

された血によって、それを最後の贖いの奉仕により、聖所の清めとともに、我らの罪をことごとく消し去ってくださるにちがいないのです。

中略…

## 罪は永遠に消滅する

こんにちわれわれは、この地上において、多くの罪や過ちを犯します。しかし、すくなくともクリスチャン同士の間では、おたがい信仰によって赦し合うことができるはずです。そうすることによって、いちおう問題は解決され、あるいはしこりも解消して、以前の関係に戻ることもできましょう。

しかし、たといそうありえたとしても、罪の事実そのものは、相手の記憶から、完全に消えることはないでしょうし、なによりも、自分の思いからも消え、良心の呵責から完全に解放されるということはないのではないのでしょうか。その結果はどうなるのでしょうか。

「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」(イザヤ書 43:25)。

「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」(エレミヤ 31:34)。

「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当たらず、ユダの罪を探してもない。それはわたしが残しておく人々を、ゆるすからである」(エレミヤ 50:20)。

「『わたしが、それらの日の後、彼らに対して立てようとする契約はこれであると、主が言われる。わたしの律法を彼らのこころに与え、彼らの思いのうちに書きつけよう』と言い、さらに『もはや、彼らの罪と彼らの不法とを思い出すことはしない』と述べている」(ヘブル 10:16, 17)。

エレン・ホワイトもこう言っています：

「すなわち、地上の聖所を汚していた罪を除いてきよめることは、罪祭の血によってなしとげられた。真に悔い改めた者の罪が、ついに贖われて、天の記録から消されて、もはや思い出すことも心に浮かぶこともなくなるように、象徴では罪は荒野に追いやられ、会衆から永遠に切り離された」(「人類のあけぼの」上巻 422、423)。

「彼らの罪はキリストの贖罪の血によってぬぐい去られていて、彼らはそれを思い出すことができない」(人類のあけぼの上巻 220)。

このように、至聖所における大祭司キリストの贖罪

の奉仕によって罪が消されるとき、それは単に忘れるとか、思い出さないとか、いうだけのことではありません。初めから、罪を犯してはいないかのように、罪も傷跡も、影も形もないまでに消し去ってしまわれるというのです。

そのうえ、相手の心からも、われら自身の記憶からも、消し去られるだけでなく、神ご自身が、われらのすべての罪とがを、天の記録からはもちろん、ご自身の思いからも完全に、しかも永遠に消し去ってしまわれるというのです。

あなたはこれを、どのように思われ、また受け止められますか？

中略……

しかし、天において今進行中の神のさばきにおいて、われらの罪が神によってきれいに消し去られるときの幸いと喜びは、どんなでしょう。まさに**もろ手を挙げ、もろ足を挙げて、万々歳を叫びたいくなるほどのものにちがいありません。**…

ともかくこれは、「手の舞い、足の踏むところを知らず」といった喜びようにちがいありませんので、あるいはこれは、「天にも昇る心地」という言葉のほうが、より真つ当な表現なのかもしれません。

## むすび：

最後に、特にこの本で訴えたかったことを、箇条書きの形で申し述べさせていただきます。

1. この本では、神の救いの計画を、その型としての聖所に基づいて考えました。そしてそのばあい、聖所を三つに区分して説明させていただきました。しかしそれは、説明と理解の便宜上、そのような方法をとったにすぎず、これを分断したり、別々のことがらとして扱うべきではないということを申し添えさせていただきます。

たとえば、キリストの十字架の贖いを、それだけですべてと見なし、ほかはいっさい捨象(しゃしょう)してしまうような理解の仕方は、絶対に避けるべきであるということ、義認にせよ、聖化にせよ、贖罪という大きな枠の中の一環として考えるようにすべきであるということなどです。

2. **聖化**、これは**義認の延長**であり、司法的に義と見なされた者は、それに対する応答として、実質的に義なる者となるための、いわば成長の過程であるということ、したがって前途に完全を理想また目標として設定し、それに向かって精進することが必要ではあるが、聖化はどこまでも過程であり途上な

のであって、終点また到達点ではないということ、ゆえにこの過程において、絶対的完全を求めるのは聖書的ではないということです。

聖化は義認に対する応答であって、われわれ自身の努力や戦いは必要ではあるが、しかしそれはキリストに在ってのそれであるべきで、キリストを離れての努力は必ず行き詰まり、枯渇におわることになります。

聖化は成長と同義であって信仰が生きているかぎり、かならず成長がみられるはずである。成長がみられないなら、それは信仰によってキリストとつながっていない証拠であって、それはとりもなおさず、信仰の死を意味することになるわけです。

3. われわれの**究極の目標は完全**であるが、それは聖化の過程の終点においてでもなければ、キリスト再臨のときでもない。それは1844年にはじまったさばきの期間、換言すれば恩恵期間においてであり、しかもそれは、至聖所における大祭司なるキリストの最後の贖罪の働きによるのです。

先の義認によって赦された罪が、この最後の贖罪の働きによって永遠に消し去られ、その結果、われわれは聖霊（後の雨）に満たされることによって、神の印を捺され、完全に到達し得た者とされるのです。

これは、義認が一方的神の恩寵によるのと同じように、最後の贖罪による究極的完全も、全面的に神の恩寵によるのです。

4. ただし、最後にわれわれ自身の責任においてなすべきことが、ただ一つだけある。それは「身を悩ますこと」すなわち、罪を悔い改めて告白し、聖所にそれを持って行って、大祭司なるキリストに引き渡すことです。われわれの罪は聖所に持って行ったものだけが消し去られるのであって、聖所に持って行かなかった罪は消えることがないばかりか、われわれ自身がその罪と共に滅びることになります。

われわれの信仰生涯の総括として、最後に成すべきことは、まさにこの罪の告白ということなのです。

5. これに付け加えさせていただきたいのは、つぎのことです。

教会員の多くは、キリスト再臨前の「七つの禍い」と呼ばれる大いなる悩みについて心配し、恐怖心をい

だいている人がすくなくないようです。しかし、これについては何よりも、すでに救いが決定したあとのことなので、災いの試練に負けて、信仰を失ったり、滅びたりすることはありえないということです。

さらに、自分のように信仰の弱い虚弱な者が、その大いなる悩みに耐え得られるものかどうかと、不安に思う人がいるかもしれませんが、これについては神の使命者ホワイトの次の言葉を覚えておくことが必要です。

「絶対的癒しを求めることは、常にただしいとは限らない。祈ってもらった人々の生存が赦されたとしても、彼らに臨む試みや試練を耐え忍ぶことができるか否かは神が知っておられる。彼は初めから終わりまで知っておられる。多くの者たちは、われわれの世界に臨む悩みの時の火のような厳しい試練の前に、眠りにつかせられるであろう」(CH375)。

「多くの小さい者たちは、悩みの時の前に眠らされるということをして、主は私にしばしば教えられた。われわれはわれわれの子供たちを再び見るであろう。われわれは天の宮廷で彼らに会い、彼らを知るであろう」(2SM259)。

生きたままで、キリストの再臨を迎えることは、最大の希望であり、特権、さいわいであるが、しかしそれは、ヤコブの悩みに耐えられる信仰の勇者にかぎられます。それ以外の人（老人、子供、病弱の人、信仰の弱い人など）大いなる悩みに耐えられない人は、その前に眠らされて、大いなる悩みから神により匿まっていたことになるわけです。

この人々には「今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである」(黙示録 14:13) という聖書のみ言葉が、そのまま当て嵌まることになるのではないのでしょうか。

6. 人類に対する神の救いのご計画は、モーセが神から示された型にしたがって造った幕屋（聖所）の構造、その中に置かれた器具、ならびに、そこで祭司によって営まれていた儀式や奉仕によって象徴され、図示されていました。

したがって、人類救済の神のご計画を知り、その奥義を究めようと思ったら、この聖所を設計図として、これに基づいてわれらの信仰と救いの体験を構築していかなければならないわけです。この設計図に基づかないで聖書を知ろうとし、神の救いを理解しようとするなら、その人の信仰の家は、やがて傾くことになるか、倒壊することになってしまうかもしれないのです。

7. **至聖所こそは、福音の完結の模型的象徴**なのです。神による贖罪の完結は、この地上と人間から罪が完

全に拭われ、消されてなくなることなのです。いったい、われわれ人間にとって、これにまさるさいわいな音ずれがほかにあるでしょうか。

「多くの人々は、天使たちのメッセージの中に、完全な真理の連鎖を見、喜んでその順序に従って受け入れて、信仰によってイエスに従い、天の聖所にはいったのである。わたしは、これらのメッセージが、神の民の錨であることを示された」（「初代文集」417頁）。

錨は、不動安全を保証するシンボルです。そしてまた、船が海洋の長旅を終えて目指す港に入港停泊する、そのしるしともなるものです。そのように、至聖所における最後の贖罪は、救いへの道の到達点を示すものであり、そして大いなる福音の完結を物語るものでもあるのです。

あとは、われらを迎えにこられるキリストに伴われて、祖国に凱旋し、永遠の家郷への帰路を、神への讃歌を声高らかに口ずさみながら、心行くまで空の旅を楽しむ、その日その時を待つのみとなるのです。

お勧めの本：



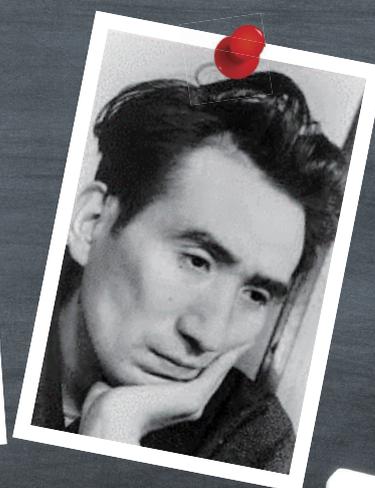
\*最新刊「人類救済の神の計画とその象徴的模型としての聖所」 及川吉四郎著 B12-5 定価 500円

先生の経験は、SDA 神学の神髄を突いているものなので、SDA の信者にとって必読の書である。



\*「再臨信徒よもう一度」 津嘉山繁著 B40-21 定価 500円

エレミヤ 6:16 「主はこう言われる、『あなたがたはわかれ道に立って、よく見、いにしへの道につき、良い道がどれかを尋ねて、その道に歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ』。しかし彼らは答えて、『われわれはその道に歩まない』と言った」。



STUDY

## 日本三文豪の煩悶

金城 重博

2004年のサイインズ・オブ・ザ・タイムズ1月、4月、9月号に、世界宣教訓練センター所長の奥山実氏の興味深い記事があった。深い洞察だと感じた。

それは、日本の三文豪についての記事である。

1. 「夏目漱石は、『人間の本质』を見事に描き、聖

書の明らかにする『罪人』としての人間を描き得たが、あまりの醜悪さに『自己本位』などという安っぽい悟りは吹き飛んでしまったのである。何の解決にもならなかったのだ。…だから人生の最後に、自己本位と全く矛盾する『則天去私』【天(てん)に則(のっと)り私(わたくし)を去(さ)る】を唱え始めた。自己本位の自己が自分で立つことができ



ず、去っていく他はないのである。しかし、哀れにも、尚も自己本位に未練を持ち、自分が何者であるかを知るために物理学まで学んだ。こうして最後まで迷いに迷って、世を去ったのである。その『まよい』を次男の夏目伸六が『父、夏目漱石』で明らかにした。

漱石の人生最後の言葉はこれである。『ああ苦しい、ああ苦しい、今死んじゃ困る、今死んじゃ困る——』。弟子たちは、この漱石の言葉を隠していたといわれる。漱石は悟っていなかったのである。」

2. 「芥川龍之介は、人生の最後にキリストを書いて自殺したのだ。そしてその枕元にはたった一冊の本しかなかった。それは『聖書』であった——」……



高い理想に根ざした『内なる声』

それは芥川の実験主義なのである。その理想に根ざした『内なる声』が、芥川を強いるのだ。『本来人間は美しくあるべきではないか。人は純粋な愛で愛しあうべきではないか』と。それなのに、現実の人間はなんとその『基準』から遠く、なんと醜く、なんと下等な存在に『墮落』していることか。その本来の高尚な自己と、現実の醜い自己との大きなギャップに芥川は苦闘しているのである。

つまり、芥川は理想主義者であったのだ。…彼は**高い理想を求めて生きた男**だったのである。

それを見逃さなかったのは、芥川研究家の一人、駒尺喜美女史である：

『芥川の価値基準は「絶対」にしかないのであって真にしる、善にしる、美にしる、愛にしる、すべて絶対的なもの純粋なものにしか価値をみず、相対的にはおりてこない』。

この様に、絶対を求めた芥川は**現実の醜いエゴイズムの愛に絶望**したのである。……ここで誰でも考えることは、①高い理想は実現しない→厭世哲学（人生を価値のないものと思うこと）→絶望（自殺）という流れである。……

常人には考えも及ばないことであるが、**高い理想など、実現しないと知りながら②それを求め、主張し続けたのだ。**

3. **太宰治**の聖書知識はキリスト者以上であった。…ほとんどキリスト者であるということと、キリスト者であるということはまさに紙一重の差だが、天地の開きがある。…



太宰と共に心中した山崎富栄（太宰の愛人）は、当時の上流社会に属する教養人であった。…山崎家は宮中に仕えてきた家系である。…しかし、彼女も実は『福音を聞いていながら拒否した』のである。…では何故、あれほど聖書を読んでいたのに、太宰は罪のかけつけである福音を拒否したのか。それは『神観崩壊』である……

明治、大正、昭和。それぞれの時代を代表する近代日本の文豪、夏目漱石、芥川龍之介、太宰治の共通のテーマは『愛』であった。詳述すれば『現代人は愛し得るか』である。そして**三文豪の結論**は、『現代人は愛し得ない』であった。明治の文豪夏目漱石は、人の中に巣くう『エゴイズム』を解決できず、大正文壇の旗手芥川龍之介は『エゴイズムのない愛なんかあるか』と叫んで自殺し、昭和のみならず、明治以来、近代日本文学最大の文学者太宰治は、形而下（この世）では、愛は死ぬことを知り、愛を形而上の世界に花咲かせるために、愛する人と共に死んだ。……

それにしてもなぜ、人はありもしない『真の愛』を求め続けるのか。それは、その真実の愛を『知っている』からである。知っていればこそ、求めるのである。

真の啓示である聖書が、その理由を明らかにする。それは人間の『墮落』である。人間は本来、愛の源泉である真の神と共に生きるように創造されたのに、その真の神を捨てて、墮落し、神の子としての高いレベルから落ちた、のである。その墮落の結果人間に与えられた**真実の愛も腐り果て、エゴイズムに変質し、種々の悲劇が始まったのである。**」

奥山実氏の記事を読んで感じさせられたこと：

1. **日本の三文豪とも聖書に接した。**
2. **三人とも真の善、美、愛、すべて絶対的なもの純粋なもの、高い理想を求めた。**
3. **人間の本質は醜悪で、エゴイズムであることを知り、高い理想は現実的不可能であることに絶望した。**

聖書を絶対的神の言葉であると信じるキリスト者は、驚くべき神の贖罪に解決を見出し、絶望どころか、人知ではかり知ることのできない喜びと平安に満たされるはずである。

奥山実氏は、「ほとんどキリスト者であるということと、キリスト者であるということはまさに紙一重の差だが、天地の開きがある」と言っておられる。

E.G. ホワイトは、次のように言っている：

「ある人々は、つねに、天の真珠を求めているように見えるけれども、彼らは、自分たちの悪習慣を全く放棄していない。彼らは、キリストが彼らの中に生きてくださるために、自己に死ぬことをしない。彼らが高価な真珠を見出すことができないのは、そのためである。彼らは、まだ、汚れた野心や世の快樂を愛する心に勝利していない。彼らは、キリストにならって十字架をとって、克己と犠牲の道を歩かない。九分通りクリスチャンではあるが、完全なクリスチャンになっていない。天国に近いようではあるが、天国に入ることはできない。完全ではなくて、九分通り救われていることは、九分通り失われていることではなくて、完全に失われていることである」(実物教訓 95)。

日本の三文豪が死を選んだ原因は、「わたしは道であり、真理であり、命である」と言われたお方に、単なる知識でなく、そのみ衣にさえ触れるという、個人的な経験をしなかったところに原因があるのだろう。完全に墮落した「邪悪な性質」を生来持って生まれて来る人間は、神が求められる「完全」な愛、義、善、美、品性に到達することは出来ない徹底的無力さを知ることからキリスト教は始まるのである。

にもかかわらず、偽善者人間は、人間の努力、行いでそこに到達しようとして平気で生きて永遠の命を失う人が多いのである。不可能なことで一生を終え、絶望してしまう。

神が人間に対して持っておられる高い理想は、創造の時から低められることはない。しかし、人類歴史に見る人間の醜態の現実には、神を信じると告白する者の中にも繰り返されている。

そこで神は、人類を元の絶対完全な理想に回復するために、ご自分の子を「人の子」として、この世に送られた。「自分からは何事もすることができない」(ヨハネ 5:19)という私たちと同じ立場に立たれて、絶対完全な罪のない生涯を送られた。なぜ、それが可能であったのか。「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである」(ヘブル 5:7)。

一瞬、一瞬、自分の思いではなく、天父のみ旨を求め、天父に依存して生きられた。その生涯は、すべての人間の模範となるのであった。

①我々のために送られた罪のない生涯、②我々のた

めの身代わりの死と葬り、③我々のための復活がイエス・キリストによって成し遂げられた功績である。その功績を信じ受け入れる単純な信仰によって義とされるのである。絶対のお方が義と宣言されるとき、義認められた人を聖書では「義人」と呼んでいる。義認められたキリスト者は、目標を目指して天路歷程の道を進んでいく。

**しかし、ここに真のすべてのキリスト者が直面する難問題が立ちはだかっている！キリストの罪なき完全な品性という目標、命令である！**

「神がご自分の子らに望まれる理想は、人間の最高の思いが達することができるよりもっと高い。『それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい』(マタイ 5:48)。この命令は約束である。あがないの計画には、われわれをサタンの権力から完全にとり戻すことがもくろまれている。キリストは、悔い改めた魂を、いつでも罪から引き離される。主は、悪魔のわざを滅ぼすためにおいでになったのであって、すべての悔い改めた魂に聖霊を与え、罪を犯さないように道を備えられた。…

クリスチャン品性の理想は、キリストに似ることである」(2 希望 20)。

日本の三文豪は、高い理想と人間の罪「エゴイズム」の狭間で解決を見出すことができなくて死んでいった。

使徒パウロも同じ苦闘をした。そして叫んだ。

「わたしは、なんとというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ローマ 7:24)。

彼は、自分を救いうるお方は、イエス・キリストを別にしては、天下のだれにも与えられていない事を発見した(使徒 4:12 参照)。そして叫んだ：

「わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな」(ローマ 7:25)。

「律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである」(ピリピ 3:9)。

使徒パウロは言う：

「すなわち、キリストとその復活の力を知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである。わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである。兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標をみざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」(ピリピ 3:10-14)。

日々死んで、日々新たに生きる経験である(1コリント 15:31 参照)。

高い理想に到達する道が神によって備えられたのである。詩篇記者は言った：「神よ、**あなたの道は聖所にあり**」(詩篇 77:13 欽定訳)と。イエス・キリストは「**わたしは道である**」と言われた。正しい聖所の研究とキリスト論にキリスト者の望みがある。

キリストの贖罪の犠牲と全能者の仲保の働きによって、高い理想、完全な品性、愛、キリストに輝く善、美が提供されている。

「私どもの贖いのために払われた価、私どものためにそのひとり子に死をさえおゆるしになった天の神の測り知れない犠牲を考えると、キリストによって私どもは非常に高潔な状態に到達することができるという観念をおこさずにはおられません」(キリストへの道 11)。

自分の罪深さ、無価値さ、無力さから目を離してイエス・キリストを仰ぐとき、真に自分の尊さが分かってきてヨハネと同じように叫びたくなるに違いない。

「靈感に動かされた使徒ヨハネは、滅びゆく人類への天の父の愛の高さ、深さ、広さをながめて、心はただありがたさと敬虔の念でいっぱいになり、その愛の偉大さ、優しさを適当に表現する言葉を見いだすことができないで、『わたしたちが神の子と呼ばれるためには、**どんなに大きな愛を父から賜ったことか**」(ヨハネ 3:1)と世界に呼びかけています。人はなんと尊い価値をもっていることでしょう」(同上)。

## 144,000 人—最高の煩悶から最高の光明へ!

生きて主を迎える 144,000 人は、キリストのみ像を完全に再現すると言われている(実物教訓 47)。しかし、生ける神の印が彼らの額に押される前に、どれほどの**煩悶**をするだろうか。

国と指導者下 193-196 頁の要点：

「彼らは自分たちの生活の**罪深さ**を、十分(完全)に認めている。彼らは自分たちの**弱さと無価値さ**を知っている。そして、**今にも絶望するばかり**である」。

なぜこのような経験をするのであろうか。①サタンが最終的に彼らの品性の欠陥を指摘、告発するからあり、②彼らが罪のはなはだしい邪悪さをはっきり認めるのは、彼らがキリストに近づき、彼らの目がその完全な純潔を凝視するからである(彼らは知っている限りすべての罪に勝利してきた人々)。

「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願する時に、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ 3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。…

さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、**世俗の腐敗に二度と汚されることはない**のである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、**誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった**。…サタンが告発をしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に**生ける神の印**を押していた。…彼らはみ座の前で新しい歌を歌うが、それは地上から贖われた 144,000 人のほかに、だれも学ぶことができない」。

144,000 人こそが、世界最大の巨大組織の機密と腐敗を暴露するのだ(黙示録 18:1-5 参照)。

黙示録 17:14 「彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」。

書籍案内



## 歴史と聖書の預言

E・G・ホワイト

1冊で 950円/冊

10冊以上で 850円/冊

50冊以上で 650円/冊

100冊以上で 500円/冊

商品番号:B20-4 A5サイズ

「各時代の争闘」の再版で、カラーの写真、絵入りの、読みやすい新しいレイアウトです。現代の真理の書籍中、最も重要なこの本を至るところで秋の木の葉のように散らしましょう。あらゆる欺瞞の中にある現代人に正しい識別力を与え真の希望を与える必読の書。



## シークレットテロリスト

—暗躍するテロリスト— **NEW!**

ビル・ヒューズ著  
砂川満 訳

1,200円

商品番号:B30-6 A5サイズ、202頁

アメリカは、今日かつてないほどの危機に直面している！アメリカの国とその憲法を破壊しようとする力が働いている。その暗闇のテロ組織は、過去に用いた巧妙な手口と方法で、日本、そして世界に働いてきた。「歴史は繰り返す！」この本は、聖書の預言と歴史から彼らの目的は、世界を支配することであると警告している。

## 讃美歌集&CD 契約の虹

讃美歌 160 選



商品番号:B70-1 A5サイズ、歌集 1,600円

:C70-1 CD8枚組 4,000円

:BC70-1 歌集&CDセット 5,000円

日本基督教団讃美歌、聖歌、リバイバル聖歌、他から160曲を選びました。音程が高い調は低くして歌いやすくしています。全160曲を収録した音楽CDもあります。



## 日本人の宗教心— 何が信仰の対象か

及川 吉四郎

1,500円

商品番号:B13-3 A5サイズ

日本人は多民族、宗教も多宗教、「ごっちゃませ宗教」「チャンポン神」と著者は言ってはばかりません。日本の神道、仏教がいかに変容して来たかに特にメスを入れ、聖書の絶対唯一、創造神に立ち返る以外に救いはないと著者は訴えています。



## まんが聖書大旅行 **NEW!**

1~3巻

各750円

デビット・キム

商品番号:B42-5 1巻 A5サイズ、175頁

:B42-6 2巻 A5サイズ、175頁

:B42-7 3巻 A5サイズ、175頁

マンガ聖書大旅行の第1巻では、天地創造からの物語、2巻ではヨセフとモーセの物語、3巻ではイスラエルのエジプト脱出が描かれています。漫画で分かりやすい聖書の物語です。

SUNRISE MINISTRY  
サンライズ ミニストリー刊行誌

Anchor

アンカーNo.57

発行人 金城 重博

〒905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471

E-mail: contact@srministry.com

郵便振込番号: 02080-0-12121

サンライズミニストリー

www.srministry.com

TEL (0980) 56-2783

FAX (0980) 56-2881

### 「アンカー」:目的と編集指針

私たちは次のことを信じてアンカーを出版しています。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使の使命である。(6T 384, 2SM 142)
2. 三天使の使命は人々をキリスト再臨に備える特別な最後の使命である。(9T 98, 大争闘下 140)
3. 三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別な贖い清めを受ける。(初代文集 414, 5,7)
4. 我々は神のご計画されたこの特

別な祝福、特別な経験を拒み続けてきた。特に1888年以来(RH26,1890年)

5. ダニエル書8:14の聖句は再臨信仰の土台であり、み業の完成はこの聖句の正しい理解にかかっている。(生き残る人々 422, EV 221, 5T 575)
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。(1SM 36)
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は、三重の使命、聖所、安息日、人の性

質、イエスの証(預言の霊)等である。(黙12:17, 19:10,22, 初代文集417, 1T 300)

8. アンカーはリレーの最終走者の意味もある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、150年も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。(大争闘下 182, 教育 328) 信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨とみ業完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の

今日の、義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたい。

9. セブンスデー・アドベンチストは最後の「残りの民」である。たとい教会がどんなに背教しようとも、近い将来、「最後の試練」(黙13章)が来る時、多くの者がふるわれ、代わりに諸教会から真実な多くの者が出てきて最後の純潔な「女の残りの子ら=レムナント」を構成し(黙18章)、永遠の福音宣伝は短期間に終わると信じる。激しいふるいの経験をして、純潔な教会となり、永遠の神の目的がこの教会によって達成されると信じている。